

求道

第七卷
第四號



求道第七卷第四號目次

求道

◎善もほしからず悪もおそれなし

自督

◎前念命終後念即生

講話

◎一向專修

近角常觀

聖傳

◎チャータカ釋尊傳

久遠劫の昔(前號に續く)

告白

◎大悲無倦

向坊久五郎

求道

第七卷
第四號

善もほしからず

悪もおそれなし

『某はまたく善もほしからず、また悪もおそれなし、』是實に他力信仰の極致である。『善のほしからざるゆへは彌陀の本願を信受するにまされる善なきがゆへに、悪のおそれなきといふは彌陀の本願をまたぐる惡なきがゆへに、』抑世上の善と稱するものは皆相對の善である、其相對の善を以て小善根小功德と貶する所以のものは、他に絕對の大善根大功德があるからである、即彌陀大悲の本願これである、此彌陀願の大慈大悲の日輪の前には、他の諸善萬行は恰も天上無數の星辰の如くである、日一たび出て、無數の星辰忽ち其光を失ふものである、此佛日の照耀を蒙りてみれば星の光は既にほしくないのである、我等善のほしきは未だ善に飽足せぬからである、我等如來大悲の御恵みに飽足してみれば、何ぞ自力の難修難善を好むべき、否今まで自力の定散二善三福九品の

雜錄

◎如來は慈父母也

近角常觀

時報

◎自督餘錄

紹介

◎和漢名士參禪錄◎佛遺教經講話◎佛教通觀

每日曜午前九時

求道學舍

〔本郷森川町一番地〕

毎土曜午后二時

第二求道會

〔九段坂佛教俱樂部〕

毎月二日午后七時

第三求道會

〔日本橋堀込町説教所〕

講話

(但シ六月二十五日土曜より夏期傳道中は總て休會)

差別善を好み、勵みつゝありしは、此の如き無限大悲の御恵を知らなんだからである、今初めて此大悲大悲の本願に遇ひたてまつりてみれば、今まで相對差別善をたのみにして居りたることの耻かしやと、更に善がほしくなりましたのである、是即ち『もろくの難行難修自力のこゝろをふりすて』と仰せられた點である、選擇集に捨閑閑抛と仰せられたのが是である、夜が明けてから行燈は不必要である、行燈のすてられぬのは無明の暗夜を照したまふ法身の光輪、盡十方無碍光の佛日を仰かぬからである。

『惡のおそれなきといふは彌陀の本願をまたぐる惡なきがゆへに』暗が恐ろしくないといふは如何なる暗でも妨ぐることの出来ない日輪が出て下さるからである、此大悲悲は如何なる無明闇黒をも照破したまふ光明である、『彌陀の本願は老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要とするべし、そのゆへは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします』闇黒強ければ強き程彌陀増さる大悲の光明である、『しかれば本願を信せんには他の善も要にあらず、念佛にまざるべき善なきゆへに、惡をもおそるべからず、彌陀の本願をまたぐるほどの惡なきがゆへに、難化の三機難治の

三病も、とても、本願醍醐の妙薬には敵することが出来ぬのである。『阿彌陀如來の仰せられけるやうは、未代の凡夫罪業のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくもと、われを一心にたのまん衆生をばかならずすくふべしと仰せられたり。』此仰をきく歸命の一念は『われらが今度の一大事の後生御たすけ候へとたのみ申して候』と御慈悲の佛日を拜まずには居られぬ、其拜んだ一念が即ち『たのむ一念のとき往生は一定御たすけは治定』と日出て、夜が明けるのである、夜が明けた已上は雲霧烟霞が如何にあらんとも恐るべからず、何物も日光を障礙するものなきごとく、惡のちそれなきといふは彌陀の本願を妨くる惡なきゆへである、實に是れ煩惱惡業が氣にかゝらぬ様になつた有様である。

惡が氣にかゝる間は善がほしいのである、善のほしいのは大善大功德に腹ふくれぬからである、大善大功德に腹ふくれ見れば、いかな罪惡深重煩惱熾盛のものも其大慈悲に融るゝかされて惡が氣にかゝらぬやうになつたのである、是實に弘願一乘海の不可思議である、其弘願といふは大經に説くが如し、一切善惡の凡夫皆生することを得るもの皆阿彌陀佛の大願業力に乘して増上縁とせざるはなしてある、行巻に此一乘

可思議の大慈悲を認めぬのである、然るに隱彰の實義に至りては五濁惡時惡世界濁邪見の我等に向て名號不思議の信心を勧めたまふのである、化巻に曰く『彰と言ふは眞實難信の法を彰す、斯れ乃ち不可思議の願海を光闡して無碍の大信心海に歸せしめんと欲して也』と、是實に他力の眞味である、藥の成分を取調べて未だ藥の不可思議力を信ぜざるものは即ち之を處方調劑したる醫者藥劑師の不可思議力を信ぜぬのである、名號不思議を信ぜざるものは誓願不思議を信ぜぬのである、是れ實に極難信と名づけらるゝ所以である、『念佛はまことに淨土にむするゝたねにてやはんへるらん、また地獄にあつる業にてやはんへるらん、總してもて存知せざるなり、たとひ法然上人にすかされまゐらせて念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候』是れ實に藥の力を信じたのである、醫者の力を信じたのである、即名號不思議誓願不思議を信じたのである、醫者の力を信じたものは必ず其藥を飲む如く、我等誓願不思議にたすけらるゝを信するや否や必ず念佛申さんと思ひたつ心起り來るのである、信は願より生ずれば念佛成佛自然なりである。

此の如く醫者の力を信ずる所以のものは醫者其人に信ずべ

海を釋して曰『海と言ふは久遠より已來凡聖修する所の難修難善の川水を轉し逆誘闡提恒沙無明の海水を轉じて本願大悲智慧眞實恒沙萬德の大寶海水と成す、之を海の如しと喩ふなり、良に知んぬ經に説て煩惱の水解けて功德の水と成るが如し』とあるが、實に此が至心信樂、南無阿彌陀佛の外に善もほしからず、惡もおそれなしの味である。

南無阿彌陀佛の天日の前には難修難善の星辰も同等の光もなく逆誘闡提恒沙無明の黑雲暗霧も何の障もなさぬのである、觀經の顯說にあらはれたる定散二善三福九品の如きは、如來の本意ではない、却て隱影の實義は、本願成就の盡十方無碍光如來の大慈大悲を説くためである、化巻に曰く『彰と言ふは如來の弘願を彰し、利他通入の一心を演暢し、達多闡世の惡逆に縁て、釋迦微笑の素懷を彰し、韋提別選の正意に因て、彌陀大悲の本願を開闡す、斯れ乃ち此經の隱彰の義也』と、是實に人生問題に於て阿闍世同様の我等が本願醍醐の妙薬によりて救はるゝ事實である、既に此醍醐の妙薬ある已上は他の藥もほしからず如何なる難病も恐なしてある、又阿彌陀經の顯說に現はれたる念佛は、たとひ諸善萬行の少善根福德に對して多善根多福德と言へど、猶自力奮勵の相對善にして未だ絕對不

き價值があるからである、名醫は患者自ら容態を述べざるに一診、既に業に其病根を認識して藥を與ふるのである、善知識は善く病を知り藥を識る、如來は大醫王である、佛かねてしるしめて、煩惱具足の凡夫と仰せられてある、極惡最下の衆生の爲に極善最上の法を説く、即ち我等が根機を洞察して選擇本願を建立したまひたのである、此如來大醫王の治療によりて本願醍醐の妙薬を與へたまふのである、『親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよきひとのおほせをかうふりて信するほかに別の仔細なき也』念佛は藥である、如來は醫王である、善知識は藥劑師である、我等患者は信するほかに別の仔細なき也である、何んとなれば諸善萬行の何れの藥も及び難きことを洞察して超世無上に攝取し選擇五劫思惟して光明壽命の誓願を、大悲の本として、成就したまひし南無阿彌陀佛である故に、信巻別序に『夫れ以みれば、信樂を獲得する事は如來選擇の願心より發起し、眞心を開闡することは大聖於哀の善巧より顯彰せり』と仰せられたが、即ち本願の妙薬を大聖醫王の善巧によりて與へらるゝ信樂開發の一念である、我等幸に此善巧方便の時至りて茲に眞の善知識に遇ひたてまつりて、横超の本弘誓を光闡し、不可思議願を演暢したまへるを一念無疑に至心信樂したてまつるの外なき也。南無阿彌陀佛。

自 督

前念命終後念即生

此度は母の病氣の報に接して歸國いたしましたところ、幸に佛様の御冥祐によりまして、母も大に快方に赴きまして、御恩の程を難有感謝して居ります。併是につきましても、何時がしれぬ此世ぢやと云ふことを、ます／＼知らして貰ひまして、難有思ひます。かねてより、私は東京に、母は國許に住居して居りますことなれば、何時如何なる病で、どの様になるかしれぬと云ふことは、御互に萬々承知して居りますことなれど、人間といふものは、いよ／＼となるときには唯如來様の御力ばかりと云ふことを知らせて頂くことが、今更の様に感ぜられます。勿論此度の母の病氣は、持病と草疲に過ぎないので、しかも周囲のものが案じるのあまり、念のために知らしたので、此方でも其事は大抵承知はしていたのであるが、萬が一にもといふ、氣を回したる心配心から念のために歸國したることなれば、決して危篤とか九死一生たう存じます。

世間でも十年一昔といふことをいふ様であります。考へて見ますれば此頃ヒシ／＼其事を思ふのであります。考へますれば、今より正に足掛かけ九年前、私が丁度西洋より歸朝いたしたる年、即ち明治三十五年のことです。其年三月末に歸朝いたし、六月一日初めて求道學舎を開きましたのであります。其年十一月のことです。父が大に草疲が出まして心淋しく思ふゆへに、若し手すきであつたならば歸國せよと申送られたことがあります。父は其時は快方に赴かれたのでありまして、其翌々年即三十七年の春になくなつたのであります。此度の歸國は丁度其三十五年十一月の時のことを思い出すのであります。

私が度々雑誌上や、若くは講話の上で御話し申しますこととてありますが、私の父のために、御法主臺下の御教化をいたゞいたのは其時のこととてあります。當時御法主臺下は新御法主として淺草別院に御修養なされて御出て有りましたが、當時是非西京へ御歸りなさねばならぬといふことになりました。恰も其歸りの御準備中でありました。其時私の親が未だ御目にかゝりませんゆへに、何卒親へと思召して、私へ御教化を

とかいふ場合ではなかつたのであつたが、しかし、いよ／＼出立して歸國となつた其時は、唯力になるは御慈悲ばかりと今更の如くしらせていたゞきました。又母も病中に、今死んでもさほど死にたくないといふ心も起らぬのは、臨終をとりつめぬのであらうかと、自ら疑ふほどであつたが、二度目にあしくなつたときには是は此度はかなはぬ、この様に段々病氣で身體が弱りて漸次死するであるかしらんと考へる様になつたら、何んとなく心淋しく思ふ様になつたとのこととてあります。『名殘惜くおもへども、娑婆の縁つさて力なくしておはるとき、彼土へまいるべきなり』との御教化は、實に此處である、今も今で、ともに御慈悲を喜ばして貰ふて居ります。右様の次第にて、母は全く快方に赴きましたなれども、せめてのこと數日間病床に待して、心を安んぜたいと思ひまするゆへに、既に先日來度々傳道のため休みました後にて、皆様には相濟まぬことなれど、一回丈土曜日講話を休ましていたゞくことに致したいと思ひます。夫についてもあまり急のことなれば、休會のことは御知らせすることも出来ねば、あまり不十分のことなれど、皆様に直接話す心持を以て、此書を書きて送りますゆへに、何卒其御心持を以て御聞下され

いたゞきたいと申述べた次第であります。其の時御教化が今歷々現に此處に捧持して居るのでありまして、此度母に申まするには、恰も此度の母の場合が其時の父の場合と全く同様である故、其時の父への御教化は此度母への御教化と頂きましようとして、共に喜ばして貰ふて居ります。父が耳順の高齡にて、近頃何となく衰弱して、心淋しく思ふゆへに、私を呼びよせて、歸郷を待つて居るそうぢやなが、夫をさうて晩秋の寂寥一しほ身にしむと仰せられた昔の御教化を、九年已後の今日、亦母の身の上に繰返へしてありがたく頂かせて貰ふて居ります。そして今より思ひかへせば、父は此時より此善知識の御教化をよろこばしていたゞき、一年半の後に此御教化を拜みつゝなくなつたのであります。して見ると、この御教化は、一旦は父が或は亡くなりはせぬかと案じたる時にいたゞきて、益々平生業成の御教化に安住して、一年半の後になくなつたのでありますゆへに、實に此御教化は執持鈔に覺如上人が、

平生のとき善知識のことばのしたに歸命の一念を發得せばそのときをもて娑婆のをはり臨終とおもふべしとある御教化を實現さして頂たものであります。即一年半の

後に父が命終りたのは、其一年半前、此御教化をいたゞいた時が、信心の上から言へば娑婆の終り臨終であつたのである。夫故母とも其事を喜ばせて貰ていたゞいて居るのであります。此度幸に御冥祐より病氣は直ほしていたゞいたのであるが信心の上から言へばかねていたゞいて居る御慈悲の程を此度の病氣を御縁として、善知識の御教化を、水際立てゝいたゞかして下されて、信心の上から云へば娑婆の終り臨終として、身體ばかり此世滞留の身として下されたことゝいたゞかして貰います。かく云へば母の身の上ばかりの様であります。是が母一人のことではありませぬ。無常の人世、老少不定の世の中なれば、母のことが即私の身の上のことでもあります。母の病氣は即私の身の上に不定の人生を知らして下さるのであります。其不定の世の中に往生ばかりは一定であるのと亦私の身の上に此善知識の御教化をいたゞかして貰ふて、娑婆の終り臨終を知らして下されたのであります。私が汽車中であつて考へたのであります。平素不孝ばかりで二十五年間侍養の恩をそむきつゝあるが、幸に此度快方に赴きたらば、其後は母の命は佛より賜はりたるものと考へて事へねばならぬと思ひました。實に此度の病氣は親も子もかねて

實に御教化の通り、人生のはかなきことは風前の燈水上の泡の如しゆめ、油断すべからずであります。

私共は昨年已來、度々の御催促に遇はしていたゞきつゝあるものであります。即ち昨年の地震が即ち是であります。此善知識の御教化は即覺如上人の執持鈔の御教化を親しく知らして下さるのであります。

一切衆生のありさま過去の業因まち／＼なり、また死の縁無量なり、やまひにおかされて死するものもあり、つるきにあたりて死するものもあり、水におぼれて死するものもあり、火に焼けて死するものあり、乃至癩死するものもあり、酒狂して死するたぐひあり、これみな先世の業因なり、さらにかるべきにあらず、かくのごときの死期にいたりて一旦の妄心をこさんほかは、いかでか凡夫のならひ名號稱念の正念もあこり、往生淨土の願心もあらんや。

實に地震のときのことを見聞するに、其當時も御話したことでありすが、實に是が人生の真相であります。此頃も私の村で現に七十九歳の老父が縊死したるものがあります。夫がしかも私の門徒であります。實に少數の門徒を有する小寺院の住職としてこの様なことでは實に上佛祖善知識に對して相

いたゞきつゝある善知識の御教化を水際立てゝいたゞきて、娑婆の終り臨終の一大事を決了して、其後氣の樂な此世滞在の身として下されたのであります。實に先日四國へ御駐錫紀念傳道のために参りたる時も、昔を思ひいだしつゝ、此御教化と執持鈔の御教化とをとり交へつゝ喜ばして頂きつゝあつたのであります。今は母の身を以て事實的に之を知らして下さつたのであります。かく新しき御縁を以て皆様も此御教化を聴聞して下されたい。

夫人世のはかなきことは風前の燈水上の泡のごとし、ゆめ／＼油断すべからず。かるかゆへに淨土眞宗の勸化は、平生業成の信の一念にて、往生の得否は定るものなり。これ皆彌陀他力本願の強縁にもようさるゝことゝ心得べきなり。其上此世滞留の間は報佛恩のための稱名念佛は勿論、爲法不爲身の心掛專一たるべきことなり。

眞諦門の御勸化をうかゞふには、歎異鈔を拜見すへし。一俗諦門の掟を守るには蓮如上人御一代記聞書を拜誦すべし。

散る時が浮むときなる蓮哉

明治壬寅歲十一月第七夜

彰如

すまぬ極と慚愧にたゞぬ次第であります。先世の業因といふものはいたしかたのないことであります。しかし幸に宿縁熟して往生決定の身とならば、何ぞ死期をいそぐべき、泥んや息災延命、定業中天のぞこりぬとまで仰せらるゝことなれば決して業報まかせて門徒教導のつとめを空しくしたる責はのかるゝことは出来ませぬ。今日は恰も鎮守の祭日なれば、午後は幸ひ法話を開きて村中の老若を集めてせめて御縁のときなりとも此善知識の御教化をいたゞいて貰ふつもりであります。即ち御教化に

故に淨土眞宗の勸化は平生業成の信の一念にて往生の得否はさだまるものなり。これ皆彌陀他力本願の強縁にもようさるゝことゝ心得べきなり。

業報は如何ともすべからず、現世の吉凶禍福は我等の豫期すべきところにあらず、此の如き暗黒無明の人生にます／＼閃き赫きたまふは如來大悲の光であります。其光は實に常住不斷の御恵であります。日の暮に赫ける星は日の暮に初めて出づるにあらず。常に赫ける星が世の光がなくなりたるときにあらはるゝばかりであります。平生業成は實にこゝてあります。平生の時届いて下された御慈悲は、人生の日暮となりたる

とき御慈悲ばかりと今更のごとく赫て下さるのであります。實にこゝが平生業成の味であります。即執持鈔に

平生のとき期するところの約束もしたが、往生ののぞみむなしかるべし、しかれば平生の一念によりて往生の得否はさだまるものなり。平生のとき不定のおもひに住せばかなふべからず、平生のとき善知識のことばのしたに歸命の一念を發得せばそのときをもて娑婆のおはり臨終とおもふべし。

實に常に申しまする親鸞聖人十九歳磯長の廟下に告命を受けて、汝命根應十餘歳、命終速入清淨土、善信々眞菩薩と仰せられた御告が、二十九歳の時、事實に實現して、法然上人たる眞の善知識に御遇ひなされたが實に親鸞聖人の娑婆のおはり臨終であります。愚禿鈔に此自督をあげたまひて曰、

信受^ニ本願^ヲ前念^ニ命終^ニ、

即得往生^ハ後念^ニ即生^ニ、

他力^ノ金剛心^ヲ、

便同^ニ彌勒菩薩^ニ。

と仰せられたが是であります。考へてみますれば九年已前父の身の上に、今は母の身の上に善知識の御教化によりて之を

みれば、恰も其安心のういた時、即二十九歳の春に於て善知識に遇いたてまつりたのであつた。而して三十三歳の時が恰も彼の父に對する御教化をいたした時であつた。考へ來れば一に善知識の言の下に前念命終、後念即生の安心をさしていたゞいたのである。あながちに一々引當てる必要もなければ、先日四國に傳道しつゝあるときより、氣がつきて思て居たことであつたゆへ、此度は其當時父が此御化導をいたゞいて、其時は亡くなつたのではなかつたが、際立てゝ其時に命終したと同時に喜ばしていたゞいたことを思ひ出し、母の現今にひきあてゝ、猶更喜ばしていたゞいたのであります。父のことやら母のことやら、自分のことやら、何もかも一時に申し述べましたが、何れも皆親鸞聖人の御教化の趣を、善知識の言の下に際立てゝいたゞいた次第を申述べた次第であります。

此の如く頂きてみれば、便ち彌勒菩薩に同じ、即もはや次の生に佛になると云ふ意味、即一生補處と云ふ點に於て彌勒菩薩と同じであります。一寸考ふれば彌勒に同じなど云ふことは非常な誇大な言の様に聞こゆれど實際である、有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみあそぶである。是實に善知

いたゞかして貰つたのであります。而して其父母の御縁によりて私の身の上に之をいたゞかして下されたのであります。是全く有縁の眞の善知識に遇はして頂きた御恩であります。

親鸞聖人が聖德太子の導に上り、二十九歳の時六角堂に參籠して、有縁の善知識を求め法然聖人に御遇ひなされたのが即ち眞の知識に遇ふて、念佛成佛は眞宗の教を受けて眞の佛弟子と御なりなされたのである。是が善信善信眞菩薩の御告命の實現したる次第である。私共は亦同様に親鸞聖人に遇ひたてまつることを得たるを喜ぶのである。而して其親鸞聖人に遇ひたてまつるは有縁の善知識の教化によりて承ることを得るのである。かく考へ來れば實に私が此善知識の御教化を受けることを得たるは、實に親鸞聖人が二十九歳の時、法然聖人に遇ひたてまつり、三十三歳の時、法然聖人の御附屬の文をいたゞかれたる昔を偲びたてまつることである。當知本誓重願不^レ虛、衆生稱念必得^ニ往生^ニといたゞかれたるは、即、信受本願と即得往生である。聖人は自己の生死問題の上に於て前念命終、後念即生、の信仰上の實驗をせられたのである。私は懺悔録の上に於て書きておきたる通りの人生問題の上より、御慈悲を知らしていたゞいたのであるが、今より考へて

識の御教化に此世滞留と仰せられた點である。此世に客にきたりと思へば不足なし、次の生に極樂に生るべき道中である、旅路である。極惡深重の衆生大慶喜心を待て、諸の聖尊の重愛を蒙る也實に仕合せもの、極である。眞の佛弟子と仰せられた。嗚呼何たる仕合せであるやら、「佛智不思議の誓願を、聖德皇のめぐみにて、正定聚に歸入して、補處の彌勒のごとくなり。」と仰せられた聖人の御思召を、我身の上に喜ばしていたゞく次第であります。

先日東京出立の時親友荻野さんが、朝吹英二氏所有の古畫聖德太子の御讚文に二十句偈の大慈大悲本誓願、愍念衆生如一子、是故方便從西方、誕生片洲興正法、我身救世觀世音、定慧契女大勢至、生育我身大悲母、西方教主彌陀尊とあるを御示し下されて、たしかに鎌倉の初期即親鸞聖人の時代のもので、當時二十句偈が行はれつゝあつたことの話となしつゝある時、恰も國よりの報知で出立して歸りたこととあります。度々申します通り、私の父及び母の導きによりて磯長に度々參詣する様になりました、聖人御參籠の昔を忍ばしていたゞく様になりましたこととありますゆへに、私としましては此度母の病氣によりて、ます／＼善知識の御教化に氣附かして

いたゞき前念命終後念即生の平生業成の味を知らしていたゞきたることは、たゞごととは思はれぬのであります。かく書きつゝあるところへ、久しく國に歸りて静養して居られた塚原秀峰君が色々心に苦まれた結果、此の頃漸く御慈悲に氣附かせて貰ふたと云ふて、喜びの心を述べかたゞ見舞にきて下されたのである。同君の申さるゝには百年鑽ユル故紙コ、何時得ユル出頭トとあることをきゝつゝありましたが、どうかしてと蠅が紙に頭をぶつつけて出ようゝとして、百年たつても出られるのではなかつた、方角が間違であつたのである、自分で出るのはなかつた、頭を同らせばチャント佛様が御慈悲でつゝんで下されつゝあつたのであつたと喜ばれた。そこで此善知識の御教化を示したところが、紀念のために御直筆を寫されつゝあるのであります。思へば、何もかも皆御慈悲ばかりであります。同君の歸宅に托して明後日講話迄に間に合ふ様に投函するのであります。

考へてみれば三十五年十一月父の呼びよせによりて歸國した其時、父母同道で京都の報恩講に參詣せられたのであります。其留守中に私が歎異鈔の御教化をいたゞき「たゞ念佛して彌陀にたすけらるまいらすべし」とよき人の仰を蒙りて信

南無阿彌陀佛。

南無阿彌陀佛。

明治四十三年五月六日午後三時

江州西源寺にて

近角常觀

求道學舍來集の御同朋御中

更衣

行誡上人

ぬきかふるわづらひもなし夏きても昔の衣はたゞひとへにて。

待郭公

ほとゝぎすまつよりほかは世の中におもふことなきわが心かな。
あすといはれ頼まれぬ身を子規名のりてすぎふ宵のまくらに。

曉郭公

いをもれぬ人にきけとや時鳥あかつきがたのつきに鳴くらむ。

旅なる人か思ひて

ほとゝぎす今もなれを草まくら結べる宵のゆめにだにきけ。

五日の朝

すいしきも葉もそへて軒端よりあやめふきおろすけさの朝風。

夏草

はなもまださかぬまがきの萩薄あきのとなりも遠きいほかな。

泉

岩まくらつたふ瀬つの音きけばむすばぬ夢もすいしかりけり。

するほかに別の仔細なきなり、念佛はまことに淨土にひまる

いたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんへるらん、總じてもて存知せざるなり、たとひ法然聖人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候」とある御教化を、人生問題の上に確信さしていたゞき其感謝の意を寫して求道學舍の講話の席にて、よんで貰ふたことを思ひだすのであります。即信仰問題に出てある一文であります。爾來九年、歎異鈔の御教化を毎朝拜讀したてまつり、常に人生の力として、護持養育の御恩を蒙りたること實に山海雷ならざる次第であります。如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし、師主智識の恩徳も、ほねをくだきても謝すべし。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。歸路には親友梶井兄の病床をたづね、又大に煩悶しつゝある御同朋を訪ふて、十四十五日の土曜日曜講話までには必ず歸京したいと思ひます、南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

これから村中の御同朋御同行に説教するのであります。願くは此功徳を以て平等に一切に施し、同じく菩提心を發して安樂國に往生せん。

南無阿彌陀佛。

南無阿彌陀佛。

講

話

一向專修

《求道學舍日曜講話》

近角常觀

今日の題は『一向專修』であります。之は御存知の如く淨土眞宗の教は一心一向である、一向專修である。一向專修といふのは、雜行雜修に對して雜り氣無く専ら南無阿彌陀佛の念佛のみを頂くのが一向專修である。此の意味をば話し度いと思ふのであります。然るに此の一向專修を話すと同時に一緒に話し度いと思ふ事は、行と信といふ事である。實は夢物語を爲るやうではあります、昨夜何ういふ事か夢の中に講話の題を選び、此の人生は總て確信を以てやつて行かねばならぬといふ事に就き、行と信といふ題で話さうと、其の心積りして居る夢を見たのであります。今朝ふと目が醒めて見ると、今日の講話の『一向專修』の味ひには矢張り此の行と信といふ關係が常に離れぬ事故、一向專修のお話するには同時に此の行と信といふ事も是非お話せねばならぬと氣が就いたのである。此の考て話を進めて行かうと思ひます。

先づ初めに一向專修といふ事柄の上からお話するに、此の一向專修といふは何ういふ事かといふに、此の淨土眞宗の上

で最も著しき特長として他宗から眺められて居る事は、一向一心に阿彌陀佛を念じて余佛を並べず、専ら南無阿彌陀佛を稱へる此の一向專修といふ事である。故に心に一心に彌陀にすがり、余行余善には更に目を懸けず専ら稱名念佛する事が一向專修であるとは誰も承知して居る。即ち淨土眞宗としては

もろくの難行難修自力のころをふりすて、一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生御たすけ候へ(改悔文)であるとは誰も思つて居る。處が今日此の題で話せんとする事は、抑々淨土眞宗で此點をば夫程迄に著しく際立て、言ふ所以は何故であるか。之が世間でよく云ふように阿彌陀佛を念ずる上は他の佛を念じてはならぬ。南無阿彌陀佛を稱へる上は現世の事などに心を寄せてはならぬと、恰も他より斯く決められたが如き意味に考へては間違ひである。信仰の上では斯くせねばならぬといふ事は初めより無い。斯くせねばならぬてなく然らねばならぬとなつて來たのである。さうあらねばならぬとなつたのは、他より強いられてさうなつたのでは無く、信仰上よりさうあらねばならぬようになつて來たの故、今日は其の源に逆上り一向專修の根本の意味を話し度いのであります。

先づ順序を追つて言ふと、言ふ迄も無く此の一向專修の大もと、法然聖人が善導大師の御教化を喜ばれた事が源である。常に話す事でありすが、法然聖人が四十三の時迄色々の道を辿り、或は戒を持し或は行を積み、有りとする修行をして往生の道を求められたが得られ無つた。最後に四十三の

法然聖人の御教化を御開山聖人がお傳へ下されたも茲である。猶ほ分り易く言ふと此の人生上何のたよりも無き我々なるに、茲に佛の我々に向はせらるゝ親心の本願がある。佛は此の私に其の遣る瀬無き親心を以て常に向うて下さる。其の廣大の本願に氣のついたのが「彼の佛の願に順ずるが故に」の御文であります。

其處で進んで其の佛の願とは如何なる願であるか、其の佛の願に順ずる姿は何うかといふに、「一心に専ら彌陀の名號を念じ、行住座臥時節の久近を問はず、念々に捨てざる者は正定の業と名く」て、佛の願には外の事が誓うてあるの無い、唯一心專念彌陀名號である。即ち第十八願を見ると外に行を修せよとあるては無い、善を爲せとあるては無い、唯「至心信樂して我が國に生れんと欲うて乃至十念せん」——即ち至心信樂欲生の有難いと頂く一心と南無阿彌陀佛の名號と唯是丈けあるばかりである。大分話が堅くなつて來ましたが、抑々佛の本願が他の事は言はずに唯一心專念彌陀名號、即ち唯佛を信じ稱へる者を救はにや措かぬとある本願である。我々は此の本願に順うて唯南無阿彌陀佛々々と念佛する、之が本願の頂けた時である。佛は他の事で我々を助けるとは仰せられぬ、唯念佛一つで助けると南無阿彌陀佛の一つを選び取つて下されたのが選擇本願である。選擇本願とは詳しく言へば我々如き罪深き何れの行も及ばぬ者、其者を助ける爲めに唯南無阿彌陀佛の一法を選び取つて下された。余の佛菩薩に心を寄せてはならぬと仰せられたのでは無い。余の佛菩薩や余行余善では行かれぬ者、何れの行も及ばぬ者、其の淺間しき我

御時初めて善導大師の『散善義』の御文を讀まれたが法然聖人が氣づかれた時である。其の『散善義』の御文が有名なる一心に専ら彌陀の名號を念じ、行住座臥時節の久近を問はず念々に捨てざる者は正定の業と名く。彼の佛の願に順ずるが故に。

の御文である。法然聖人は四十三の御時此の御文を讀んで初めて彌陀の本願に氣がついた。殊に「彼の佛の願に順ずるが故に」とある處が肝腎である。彼の佛の願に順へば、即ち彌陀の本願に氣がつけば、此の本願は我を救うて下さるのである。既に一心に専ら彌陀の名號を念ずる者を必ず救ふと佛の本願にあるのである。此の二十八文字中「彼の佛の願に順ずるが故に」の一句が殊に大切である事は常に言ふ通りであります。即ち法然聖人は夫迄念佛を稱へられぬては無い、色々の修行をせられぬては無い、けれども自力の自分の行を以て安心せんとして居られた間は眞の安心は出來無つたのである。我々は自分の願で行くのでは無い、自分の行で安心するのでは無い、唯彼の佛の願に順ふばかりである。如來が我々を救ふとある本願が昔より常に我々に向ひ、我々を哀はれんで居て下さる。信仰の問題は時代によつて變る事は無い、今日で言へば我々が人生上自己の修行自己の實踐によつて安心せんとして居るが、安心する事が出來ぬ。彼の佛の願に順ずるが故に」とは其の何れの行も及ばぬ我々を哀れと思召して、此の者に向つて佛の廣大なる御本願がある「彼の佛の願に順ずるが故に」であるから、我々は唯此の本願の力によつてのみ救はるのである。選擇本願といふ事は茲から出て來るのである。

々なれば其の者を助ける爲めに此の南無阿彌陀佛の自分の名を念ずるばかりであるぞと、此の余の佛菩薩では救はれぬ者余行余善ではゆかれぬ者の爲めに南無阿彌陀佛の一法がましますのである。之が一向專修の根源である。茲を能く頂かねばならぬのである。兎角宗教の事でも根源を忘れると肝腎の意味は薄くなり規則に陥ちて有難く無い。成程一向專修の教法は親鸞聖人の宗旨であり、法然聖人の教化であり、善導大師の教であるが其根本に逆上るともと、佛の本願が一向專修なのである。抑本願の文が「設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺」とあるのみで、善をした者行を爲た者を助けるとあるのては無い。唯一向に念佛する者といふ難き氣無き願である。此の意を法然聖人が著しくお氣づきなされたが善導大師の御文である。唯本願の文だけ讀みては分らぬなれど、善導大師が一心專念彌陀名號と書き、第十八の願文は外の事は無い、唯一心に佛を念じ一向に南無阿彌陀佛を稱ふるばかりである、斯く一心專念に喜ぶ事が即ち佛の願に順ずるのである、もと、佛の願に斯く誓はせられてあるのである、と知らせ下された。此の御文を讀んで本願大悲の意に氣づき、其の本願の仰せ通りに南無阿彌陀佛々々と喜ばれたのが法然聖人である。

も一つ言ふと如來の本願に一心專念と誓うてある故に其本願の仰せ通りに一心專念にするのであると、本願を定規にする一心專念ではまた本願に順ずる眞意は頂けて居無いのである。先づ本願の意を能く頂かねばならぬ。本願に一心專念と誓はせられし其の心は何であるか。余佛余菩薩が念ぜられ孝

養父母奉事師長等の余行余善が我々に出来る位なら、一心専念とは仰せられぬのである。諸佛淨土の中には或は布施を以て往生の行とするの土あり、或は菩提心を以て往生の行とするの土あり、乃至孝養父母奉事師長等を以て往生の行とするの土もある。けれども之等の行を以ては到底及ばぬ人間である。貧しき者は布施の行では助からぬ。破戒無戒の者は戒を以て往生の行とする佛土が有つても行く事が出来ぬ。孝養父母奉事師長は有つても十惡五逆の者には仕様が無い。茲に於てか一切の凡夫普く生れ、有りとする者悉く救はんが爲めに、總ての他の行は選り捨て、唯南無阿彌陀佛を専ら選り取つて之を以て救はんとするが本願のお心である。此の廣大の本願に順ふとは、如來の本願に一心専念とあるから余行余善は出来るけれどもせぬのであるといふのでは如來の本意には叶はぬのである。我々は自分の力で色々の事が出来たり、余行余善が出来てもするかの様に思ふて居るのであるが、夫が出来ぬ我々なればこそ、其罪惡の者を救はんとする御親心の塊りの南無阿彌陀佛である。度び／＼いふ譬なれども親が手織りの着物を作つて下さる。親が手織りの着物を作つた上は否やても應でも之を着るといふのではまだ本當に親の心が頂けたのでは無い。親が手織りの着物をこさえて下さる其親心は外の着物が着られる我々なら親はこさえてはせぬのである。外の着物が着られぬ我々なればこそ、他の行は及ばぬ我々なればこそ、親はこさえて下されたのである。着られぬ奴目に着せようと之をこさえて下されたのである。親が一枚の手織りの着物を選り取つて下された其の親心は、外の着物を着て

はならぬと言はれたので無い。外の着物の着られぬ者に着せようとこそ南無阿彌陀佛の一枚の着物を選り取つては下されたのである。彼の佛の願に順ふとは、斯く何れ行ても行けぬ私を助けんとする南無阿彌陀佛の恵みである、何れの着物も着られぬ私への一枚の南無阿彌陀佛でふりますと、斯く本願のお心を頂けば之を着すには居られぬのである。今日の言葉で言へば本願に一心専念と標榜してあるから、いやても一心専念にするのであると斯うなつては本願のお心に順うたとは言へぬ。一心専念でなければ外の事では到底行かれぬ我々なればこそ、一心専念とは示し下されたのである。中々此の一心専念がひと通りの一心専念では無いのである。今日の信仰問題で言ふならば、慈悲と言へば佛は皆な慈悲である。何も特に阿彌陀佛々々と阿彌陀佛を角立て言はずとも、御慈悲が有難いと言ふ以上は唯佛と言ふだけではないか。南無阿彌陀佛が善ければ、南無大日如來でも南無藥師如來でもよい。否な佛は慈悲である神は愛であるといふつまり同じ事である。と、斯る言ひ方が寧ろ一般の思想界には是認せらるゝかのやうに思ふて居る人が多いのである。夫ては阿彌陀佛が有難いのも何んでも無い。佛は平等である故阿彌陀佛でも大日如來でもよいと言ふならば、親がこさえた手織りであらうが、人の作つた着物であらうが、着物であればよいといふ言ひ方である。夫て居て外の着物を着てはならぬ、親の着物を着ねばならぬと、外の着物と同じと思ひながら、他の佛を念じ度いと思ひながら、強いてする一心専念では本願の一心専念では無い。抑本願に一心専念と誓はせら

れし其の本願の太もとのお心を頂かねば駄目である。他力の恵みの有難いのは茲である。佛既に本願に一心専念と誓はせられた、味ひは茲である。大抵の人は一心専念を此方に置いて居る。忠臣は二君に事へず貞女は二夫を並べずと、一心専念を自分の方に置いて居る。自分の方に置いて居る間は本當の眞味は分らぬのである。忠臣は二君に事へず貞女は二夫を並べずといふは、然うしてならぬ、事へてならぬといふのでは無い。眞に主君が我に對する殊恩を思へば、然うする已外に外に行きやうが無いのである。主君の恵みで自然に然うなつて來る處で始めて忠臣であると言つたのである。

我々本師法王の阿彌陀佛と言ふ、さうなるもとは何んであるか。阿彌陀佛の本願が他の行で及ぶ本願なら超世無上の本願とは言はれぬ。超世無上の本願といふには、普通の佛の本願とは違つてある處が無ければならぬ。成る程佛として慈悲ならぬ佛は無い。けれども諸佛中の王なり光明中の極尊なりといふからには、他の諸佛とはひと際違つた處が無ければならぬのである。今阿彌陀佛は無量壽無量光とある。他の諸佛は慈悲光明とはあつても無量壽無量光とは申さぬ。和讃に、

超世無上に攝取し、

選擇五劫思惟して、

光明壽命の誓願を、

大悲の本としたまへり。

抑佛境界の根源から現れて下されたが阿彌陀佛である。超世無上に攝取し——世に超えて此上無き超世無上の本願である。「選擇五劫思惟して」——即ち布施持戒忍辱精進智慧禪定之等を以ては到底及ばぬもの故に之等の者は皆な選り捨て、唯南無阿彌陀佛の一法を以て救ひ取らんと誓はせられた選擇

攝取の御本願である。五劫思惟と言へば長い間掛つて御成就下された其の事柄を能く頂のかといふに、否な此の何れの道も絶え果てた此の者を救はんとする其の御親心一つが五劫の本願である。『御文』に

それ五劫思惟の本願といふも、兆載永劫の修行といふも、たゞ我等一切衆生をあなたがちにたすけたまはんがための方便に阿彌陀如來御辛勞ありて、南無阿彌陀佛といふ本願をたてまし／＼て、云々。

既に本願の方に斯くの如くあるのである。一心専念といふは茲の譯である。斯く迄罪深き何れの行も及ばぬ、菩提心も起らぬ、親孝行も出来ぬ、其者を可哀相と思召して、其者を助けんとある親様の御本願である。行といふ事は茲で申さねばならぬ。

二

其處で行といふは佛の方で、我々行の出来ぬ者と佛より斯く極めて置いて下さるのである。我々何れの行も及ばぬものと、既に見込んで本願に斯く資格が極められてあるのである。親鸞聖人が法然聖人の教を聞かれた時御弟子の中で信不退行不退といふ事を仰せられた。行不退で無い、信不退であると言はれたのは、行者のする行で無いと言はれたのである。親鸞聖人が斯く仰せられるで無く、佛初めより然う言つて下さるのである。其の何れの行も及ばぬ者故其の者を助ける爲めに佛の方より一心専念にして下さるのである。着られぬ者故佛の方より着物を着せて下さるのである。念佛は他力の代行

て行者の行て無いといふ事は茲から出て来るのである。『歎異鈔』に、

念佛は行者のために非行非善なり。云々。

とあるは茲である。此方は行の及ばぬ者、其の者を助ける爲めにこさえて下された如來の御まこと心が南無阿彌陀佛である。如來が我々の行も何も出来ぬ事を初めより見届けて、其者を助ける爲に現はれた此の南無阿彌陀佛である、此の南無阿彌陀佛の親の居る事に氣をつけて、唯ひたすらに念佛すべしと言つて下さるのである。南無阿彌陀佛々々と、ひたすらに如來の恵みを喜んで念佛する、我々に於ては唯之ればかりである。茲が法然聖人『選擇集』の御教化である。

法然聖人『選擇集』の御教化の上では唯南無阿彌陀佛ばかり余行余善は難えぬと示し下された。『選擇集』は萬善萬行を傍にし難行難修を捨て、聖道門を擲き余行余善を抛つといふ事を書かれた御聖教である。法然聖人一代の教化は一向專修といふ事を際どく示し下された御教化である。法然聖人は善導大師の仰のまに、有難き本願の思召を頂き、南無阿彌陀佛々々とひたすらに念佛なさるばかりである。法然聖人より言ふと信心を得るといふ事迄が無い。信心を得んたらんといふと信心といふ事に力を入れて自力の信に陥るから其處迄も仰せられぬのである。唯疑ひ無く信じて念佛するばかりである、南無阿彌陀佛々々と名號を稱へて喜ぶばかりである、即ち念佛爲本の御教化である。『親鸞』におきては唯念佛して彌陀に助けられ参らすべしと、是丈けお説き下されたが法然聖人である。て法然聖人の教への上でも南無阿

られたのである。之が自から謙遜し身を落として斯く仰せられたので無く、實際御慈想に氣がつくと、何人も念佛の外には何物も無いのである。

法然聖人の御流罪は此の一向專修といふ事がもとになつて來たのである。唯念佛を稱へよと言ふ丈けて流罪になるといふ事は無い。法然聖人は『選擇集』に、此の本願には菩提心も投げ捨て、ある、乃至一切の座禪戒行皆捨て、ある、其の何れの行も及ばぬ者を助けようとの南無阿彌陀佛である、此の念佛を喜ぶばかりである、と示し下された。之が流罪になるならぬの大騒動になつて來たのである。若し然らば其の時の佛教は總てつづれる事になつて仕舞ふのである。實に茲は力強き所である。其の時の佛教から言ふと、菩提心を離れて何處に佛道修行があるか、佛弟子として五戒十善の戒律を持たなんだら何處に佛教といふ事が言へようと、梅尾の明恵上人はじめ當時の人達が烈火の如く怒られたも無理は無い。然るに法然聖人にしてみれば、其の當り前の事が出来る位なら佛は南無阿彌陀佛とは仰せ下さる。佛が南無阿彌陀佛と示し下されたものは、破戒無戒五逆十惡、此の末代不善の者をお救ひ下さらんが爲である。『古德傳』で頂くと、彌々御流罪となつた時、聖人御弟子の一人に對して一向專修の道を説き聞かせ給うた。處が御弟子の西阿といふ人が傍に居て、今日此の事を仰せらるゝは如何がかと申し上げられた。其時聖人の仰せに『汝經釋を見ずや』と。すると西阿が經釋は然うても世間の機嫌がいかにと申上げた。此の時聖人重ねて仰せに「我たとひ死刑に行はるとも更に變ず可らず」と仰せられたとある。

彌陀佛は信ぢや行ぢやと區別のある南無阿彌陀佛では無い、唯一念佛である、余行余善に心を寄せるでない、余行余善が出来位なら南無阿彌陀佛は無いのである、と、唯ひたすらに南無阿彌陀佛々々と喜ばれたのが法然聖人の御一代の御教化である。

偕て斯くの如く頂く時は、此の法然聖人の一向專修といふ事は實に尊い事で、此の一向專修の道開け、茲に初めて我々助かる道が出来たのである。度々言ふ事なれども、法然聖人以前にも念佛の教えは有る事は有つた。永觀律師の『往生十因』などを見ると、法然聖人以前念佛を稱へた方は澤山あつたのである。遠く言へば光明皇后はじめ中將姫など念佛往生の方々は澤山あつたのである。が、一向專修の念佛といふ事は法然聖人迄は無つたのである。一向專修といふ事が現はれて茲に念佛宗が出来、念佛で無ければ助からぬといふ事になつたのである。夫迄は念佛はあるはあつても値打ち無き念佛で身體て座禪する代はり、口で陀羅尼を唱へる代はりに稱へて居た念佛である。夫ならば大日如來を念ずるも藥師如來を念ずるも同じ事で、一向專修といふ意味はつひに現はれて來なかつたのである。法然聖人に到りて茲に初めて一向專修といふ事が起つて來た。夫が法然聖人が自分の計ひや經驗で言はれるので無く、既に佛の本願に一心專念とちやんと明かに誓はせられてあつたのである。法然聖人が自分で力んで唱へられた念佛では無い。夫迄に一切經は度び／＼讀み、一代の戒師と仰がれ給うた其の法然聖人が、自からは戒律一つ間に合はぬ愚癡の法然房、十惡の法然房と言つて、唯ひたすらに念佛稱へ

設ひ殺されても此の罪深き者を助け給ふ念佛ばかりは言はずには居られぬのである。若し法然聖人が此の一向專修といふ事を厳しくお示し下さる事無ければ、流罪の御苦勞は無つたのである。

さて夫程迄に法然聖人の御苦勞下された其の一向專修を美しく頂く人は其の當時に於ても甚だ少なかつたのである。法然聖人が一向專修とお示し下さる故、唯一心一向に稱へるのであると稱へる人は多かつた。親が之を着よとてこさえて下された手織りの着物故、外の着物を着てはならぬ、此の着物を着ねばならぬと着る人は甚だ多かつた。けれども親がこさえて下された眞實の思召を頂いて着た人は其の數甚だ少かつたのである。茲は一向專修の極肝腎の處である。法然聖人の選擇本願の旗印の下に集つた人達故、親のこさえて下された手織りであるといふ事、南無阿彌陀佛の一法であるといふ事、之を忘れて居た人は一人も無い。否な寧ろ着る段に於ては親のこさえて下された南無阿彌陀佛を着るのが一番よい、否な着ねばならぬ／＼と思つて稱へた人は澤山有つたのである。けれども彌々此の南無阿彌陀佛の手織りの着物を着る其の親心の有難さを頂いた人に到りては其の數甚だ少なかつたのである。即ち親鸞聖人は之をお頂きなされたのである。

親鸞聖人は頂くは何處をお頂きなされたのであるか。即ち『歎異鈔』第二章である。

親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて信ずるほかに別の子細なきなり。……

といふのは唯念佛ばかりである、外の事を彼是れするのでは無いぞ、唯此の本願念佛の仰せを頂いて、信ずる外に別の子細は無いのであるぞと示し下されたのである。

……念佛はまことに淨土にむさるゝたねにてやはんべらん。また地獄におつる業にてやはんべらん。總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふらふ。

親の手織りが他の着物より善いから着るのであるなど、着物の値打ちの有る無しや、自分の着る着心に力を入れるのて無い。法然聖人が着よとあるから、仰せのまに／＼着たばかりである。設ひ之を着た爲めに地獄に墮ちる事ありとも、更に後悔する事は無いのである。其の故は、

……そのゆゑは自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはこそすかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

此の一言が親鸞聖人が自分勝手に言はれたので無い。即ち如來が何れの行も及ばぬ者故、其の者の爲めに御成就下された南無阿彌陀佛の一枚の着物である。夫を頂く此方の心は、外の着物も着られるけれども親が着よとの仰せだからと、斯く思ふてゐる間はまだ眞に親の心を頂き、親の着物を着たのでは無い。親の手織りは此方が他のどんな着物も着られぬ奴故其の爲めにこさえて下された一枚の着物である、夫が親の大慈悲の慈悲であると親の親心に氣がついた處で初めて着させて貰

ふ事が出来たのである。「何れの行も及びがたき身なれば」といふ一言は、本願の初めより佛が我々の値打ちを見て置いて下された事が始めて我が身に分かり、今迄は何れの着物も着れる身と思つて居たが、然うてはなかつた、此の一枚の手織りてなけにや行かぬ身であつたと、始めて親様のお蔭で知らせて貰へた時の味ひである。

大分筋を分けた話になりますが、我々の頂き所は此の一つである。其處で昨夜夢の中に講話の題を選んだ時、人生は確信を以て立たねばならぬ、確信を以てやれば如何なる行も出来るといふ味ひを考へた。其の確信が自分で力みする確信では無い。ひとたび人生問題に苦しみて佛の親まします事に氣がつけば、人生凡ての行ひが皆な此の信一つで成り立つといふ事である。之を安心の言葉で言ふならば、一度び恵みを頂きお慈悲に氣がつく上からは、人生上何をさせて貰ふにしても皆な如來廻向のお慈悲の中の日暮である。即ち信と行といふ問題が茲である。人生、唯此のお恵みばかりと氣がつけば、人生何も彼も皆な此恵みであると、即ち行といふ事がお慈悲一つから皆現はれて来るのである。此の事に就きて今少し話さうと思ひます。

三

夫は何であるか。矢張り初めの一心専念といふ事に氣をつけねばならぬのである。我々は佛が有難いと云ふ。佛が有難いが又世間の事も有難いと思つて居るならば、未だ眞に佛が有難いと頂けて居るのでは無い。實は世間の榮華榮華、名譽

幸福即ち一言に言へば世間の常樂我淨を直ぐ活かして、之が佛の恵みであると喜んで居るのである。いかぬのである。抑々佛の一心専念の味ひは何んであるか。總ての事の上に此の味ひは行き渡つて居る。人生の事で言ふならば、人生の事は一つも當てにならぬ。煩惱具足の凡夫火宅無常の世界。此の世に常住のものを求めて夫れが求められる位なら、如來常住無有變易とは仰せられぬ。此の世がいつ迄も當てになる位なら何も特に淨土を作り無量壽佛と示し下さる必要は無いのである。若し我々自分で善き事が出来る位なら、何故特に佛は南無阿彌陀佛とお誓ひ下されたのであるか。我々人生が當てになる位なら、如來でなくとも人て善い、何も特に如來の現はれ給ふを要せぬのである。抑々佛の此の世に顯はれ下された其の大もは何であるか。『歎異鈔』には宣はく、

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのことみなもてそらごとたはごとまことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそおほせはさふらひしか。

南無阿彌陀佛といふ廣大な如來の現はれて下された大もとは人生上より言はうと、佛道修行の上より言はうと、我々の日常生活の上より言はうと、乃至社會國家といふ上より言はうと、何から言はうと我々が夫等凡ての方面に於て自分の身が當てにならぬ、又人が當てにならぬ。其の凡てに當てにならぬ者故に、其の火宅無常の世の中に眞の救ひのもとになる爲めに現はれ給ひし無量壽の佛である。又此の十方有りとする障りを除く爲めに現はれて下された無碍光の如來である。抑々佛が南無阿彌陀佛と光明無量壽命無量の誓ひを起させられた其の

大悲の佛のお心は、人を當てにするな、人が當てになるては無い、人に求むるな、人に求むるが間違ひである、自分が當てになるては無いぞ、世間が善くなると思ふが間違ひであるぞと、此の煩惱具足の凡夫火宅無常の世界、此の仕て見様無き者を哀れみて、其者を助くる爲めに現はれ下された如來である。茲になると此の他力本願を頂く上に於て、我々は常に此の事を言葉の上に言ひ過ぎて居る。我々は罪が深い障りが多い、そつといふ者を助けて下さるお慈悲であると、自分の方で勝手に如來のお心を持ち代へて、夫て心を抑えて行かうとして居る。當てにならぬと言ひつゝ矢張り自分の心を當てにして居るのである。我々は當てにならぬ罪の深い障りの多い仕て見様の無き者である。其の仕て見様の無き者故其の者が哀れぢやと現に眺めて居て下さる遣る瀬無き如來のお心である。我々は此の佛の恵みを頂き、此のお慈悲一つに安心してこそ、此の世に眞に安心が出来、恵みばかりと喜ばせて頂く事も出来るのである。實に前を見れば茫々行く先きが分からず、後を見れば漠々として一點の光りも無い。眞に生の就來する所を知らず死の趣向する所を知らず、冥より冥に入り、苦より苦に入る、仕て見様の無き人生である。其の仕て見様無き人生に於て唯遣る瀬無き佛の廣大のお慈悲があるばかり、遣る瀬無き思ひを以て眺めて居て下さる佛の御慈悲があるばかりである。此の遣る瀬無き佛の御慈悲に氣がついて見れば此のお慈悲ならては此の世に當てになるものは一つも無い、此のお慈悲一つで安心させて貰ふのである。佛も有難いが外の事も有難いなど、外事思ふ心を自分で無くさうとするの

では無い。萬づの事皆な以て、そら事だは事一つも當てになる事無き世の中に、其者を哀れと思つて居て下さるお慈悲ばかりである。此のお慈悲一つて喜ばせて下さるのである。此のお慈悲一つに氣づかせて貰へば、外の事思ふ心を離へようとしても難へる事が出来ぬ。外の事樂しまうと思つても樂む事が出来ぬ。外の事は眞に當てにならぬ世の中である、人生眞に當てになるは唯佛のみである。と知らせて貰うのである。茲が佛のお慈悲に氣づかせて貰うた處である。其の遣る瀬無き佛のお心に氣がつけば、人生は此の恵みばかり、外の事は當てにしようと思つても當てにならぬものである。其の當てに出来ぬ外の着物は着られぬ者に作り下された一枚の手織である、手織りの有難い事が分つて見れば、外の着物などは着ようと着て見様が無い、唯本願の手織りの着物ばかりである。茲が南無阿彌陀佛の有り難い處である。此の南無阿彌陀佛の廣大な親心を知らせて貰へば、人生唯南無阿彌陀佛のましますばかり、外の事などは更に必要が無い。法然聖人の御歌に

阿彌陀佛といふよりほかは津の國の

難波のことあしかりぬべし。

南無阿彌陀佛以外は何を言つても「惡しかりぬべし」。南無阿彌陀佛以外は何物も無いのである。法然聖人が一代一向專修と言はれたのは茲である。外の事など言はうたつて言ふ事が出来ぬ。唯南無阿彌陀佛の一つである。外の着物が着度いの外のものが好ましいのと、そんな念慮は起し度くても起つて來ぬのである。

其處になると蓮如上人の『御文』に、

をよまむにあそびたはふれんにをなじからむや。藥師には八菩薩の引導あり、これを念ぜんはむなしくねむらんにいふべからず。かれを專修とほめこれを難修とさらはむこといまだそのころをえず。

と言ひて、他の經や他の佛を念じてもよからう、もと一日一萬邊の念佛を稱へてからならば、進んで善い事する分には差支無からうと、此の思ひが起つて來る。つまり外の着物を重ね着してもよいではないかと言ふのである。そういふ思ひの起るのはまだ自分が一角善い事出來る氣で居るからである。外の着物は間に合はぬ、外の着物は着れぬ身であると茲に確つかり覺悟が出來て居無いからである。外の事出來れば爲ても差支なからうといふのなら手織りの着物着る事は出來ぬ。法然聖人は選擇本願念佛南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本、唯念佛であると言はれたけれども、諸行も功德故出來たら爲てもよいとは仰せられぬ。念佛以外に諸行も爲てよからうと、諸行を許して仕舞はれたのは親鸞聖人以外のお弟子が言はれた事である。誰れが言ふたか知らぬが此の淨土眞宗を、一向宗と際立て、名けたは茲である。何れの行も及ばぬ者、何れの着物も着られぬ者、其者に着せようと仕立て、下された一枚の手織りの着物であると、茲の處に如來の親心が分かつて見れば之が有るから着ようぢや無い、今迄外の着物を着ようとして居た事の耻かしやと、唯々慚愧の思ひあるばかりである。茲が實にお慈悲の有難い處である。

それで此の世の事が何もかも佛の慈悲であり恵みであると頂けると頂けぬとは、外のものを離へるか離へぬかによつて

うれしさをむかしはそてにつゝみけり
こよひは身にもあまりぬるかな、

うれしさをむかしはそてにつゝみけりといへるこゝろは、むかしは難行正行の分別もなく、念佛だにも申せば往生するとはかりおもひつるこゝろなり。こよひは身にもあまるといへるは、正難の分別をきゝわけ一向一心になりて信心決定のうへに佛恩報盡のために念佛まうすこゝろはおほきに各別なり。かるがゆへに身のをきどころもなくおどろあがるほどにおもふあひだ、よろこびは身にもうれしさがあまりぬるといへるこゝろなり。

「昔しは難行正行の分別もなく、念佛だにも申せば往生するとはかり思ひつる心なり」といふは、親の手織りも外の着物も區別無く、唯着ればよいて着て居た時の心である。成る程一寸思へば佛は慈悲故有り難い。有難いのが御信心に違ひはなけれども唯念佛すればよいと思ひ、佛も有難いが外の事も有難いと、外の事にも心が寄るようでは、まだ眞に有難いと頂けた味ひでは無いのである。然ういふ喜びならば、南無阿彌陀佛は親のこさえて下された着物故、一番肝腎ではあるが、外の着物も有る上は、外の着物も着てよいでないか、といふ思ひが起つて來る、『唯信鈔』にもある如く、

これにつきて人うたがひをなさく、たとへば人ありて念佛の行をたて、毎日に一萬邊をとなへて、そのほかはひめもすにあそびくらしよもすからねむりおらむと、またおなじく一萬邊をまふしてそのうち經をもよみ余佛を念ぜんといづれかすぐれたるべき。法華に即往安樂の文あり。これ

決まるのである。外の事も間に合ふだけは間に合はすのであるとなつて、お慈悲といふ事は人生の一部分にしか現はれず外に大變難い物が必用になつて來る。之が即ち難行難修である。人生明に難行難修か起つて來るのである。茲を能く頂いて欲しい。今日は何も彼も申しますが、世間では能く宗教も人生一部分の働きてある、多くの事柄がある中の宗教も其の一部分であるといふ言ひ方をする人がある。宗教家は宗教でやり、政治家は政治でやる、人生は色々のものが寄つてたかつてやつて行くのである、といふのなら一部分の働きのしかならぬ。人生の事は皆自分でやつて行くのである、日常生活は自分でやつて行くより外に仕方が無い、となると宗教もごく一部分の力となつて仕舞ふ。けれども我々人生の事が初めより自分の力でやつて行ける位なら、初めから宗教の必用は無い。人生の事は自分も人も當てにならぬ、政治も經濟も當てにならぬ、其の當てにならぬ仕て見様無き私故、其の者を助ける爲めに如來のお慈悲があるのである。其の廣大のお慈悲を頂く一つで、始めて我々人生に安心が來るのである。此の如來のお慈悲無くは一刻一時も安心しては行けぬ世の中に此のお慈悲一つがましますとせばこそ、有りと有らぬ世の中の事總て未來の一大事を始めとして、攝取の光明中にをさめられ、お慈悲の中に安心して日暮させて貰へるのである。世間で思つて居るとは大違ひである。世間では、此の世の中を初めより此の儘で安心出來るものと思つて居るのであるが、此の世の中は當てにならぬ、仕て見やうが無い。其の仕て見やう無き者を助けて下さる親心、此の一つを頂けば、其の當て

にあらぬ仕て見様無き私が、此のお慈悲ばかりで此の世より盡未來際の末に至る迄安かに導かれるのである。此のお慈悲以外に有難がる時は、お慈悲以外のものが有難い丈け夫れ丈けお慈悲で無いものが澤山這入つて来る。如來大悲の教は此の仕て見様無きたより無き私を救うて下さるお慈悲ばかり、此のお慈悲一つで安心させて貰ふのである。此のお慈悲一つに遇は無つたら無量永劫助かる道は無い。此の世で如何に幸福に暮さうが、實に生き甲斐の無い人生である。此の道る瀬無きお慈悲ましませばこそ初めて無量永劫安心の日暮しがさせて貰へる。斯く危き世の中に偏にお慈悲一つで安心して暮させて貰ふのである。今迄人を當てにして居たが、當てにして居たが間違ひである、當てになるは佛の廣大の慈悲ばかりであると氣づかせて貰ふと、今迄當てにならぬものを當てにし不足に思つて居た私こそ、實に罪惡深重の衆生である。其私を初めより承知で、其者を助けんとてお立て下された廣大の御本願であつたか、此のお慈悲一つが有難い。此の大悲の親よりいふ時は、大小の聖人輕重の惡人皆な等しく一様に哀み下さる慈悲である。お互に喜ばせて貰ふは此の恵み一つ、此の恵みならずば外に當てになるものは無いとなるのである。『行卷』には宣はく、

明に知ぬ、是れ凡聖自力の行に非ず、故に不廻向の行と名くる也。大小の聖人輕重の惡人皆な同く齋く選擇大寶海に歸して、念佛成佛すべし。

斯く當てになるは南無阿彌陀佛の一法ばかり、此の南無阿彌陀佛は佛が十方の衆生に向ひ哀れみの心を以て呼びかけ下さ

れしさを昔は袖に包むといへるは……往生するとはかりおもひつることなり。嬉しさを昔は袖に包むといふは、

念佛も有り難いが、諸神諸佛も此世の事も有難いと言つて居る者の事である。こよひは身にもあまるといふは、正雜の分別をきゝわけ云云。正雜の分別を聞き分けといふは、初

めて此の親心を聞き分けて見れば何れの行も及ばぬ、如何にするも善心の起る事の無い、此の仕て見様無き不孝者を助けんとする廣大の御本願であつたかと、彌々玆に佛の御本意を知らせて貰うて見れば、外に物の並べて見やうは無く、雜えて見様は無い、一向一心になりて喜ぶばかりである。親の手織りを頂くは、着てから漸く斯く廣大の親の慈悲であつたかと知らせて貰ふのかといふに、否其の手織りをこさえて下された大慈大悲の親心が分かる一念に、思はず口に南無阿彌陀佛々々々とお念佛が浮んで下さる、其念佛申さんと思ひ立つ心の起る時、此の着物着ようと思ふ一念に、未だ身に其の着物着けずとも頂けるのである。此の道る瀬無き御心の分かる其の一念である。其の一念にはいやと言つても着ぬとは居られぬ。其の一念に頂いて見れば、此の當てにならぬ世の中に此の者を見捨て給はぬは一佛であると、世の中の事を見るにつけ聞くにつけ彌々念佛喜ぶばかりである。此の如來の御恩一つと頂いてからは世間の事何に遇ひ彼に遇ふにつけ、喜ばしきは如來の御恩ばかりである。『和讃』に

彌陀大悲の誓願を、

ふかく信ぜんひとみな、

ねてもさめてもへだてなく、南無阿彌陀佛をととなふべし。如來廣大のお慈悲に氣のついた一念からは、南無阿彌陀佛々

る其の呼び聲である。して見れば南無阿彌陀佛を稱へる事は凡聖自力の行ては無い。玆は親鸞聖人の御教化の上で、ごく大切な處で、此方が一聲南無阿彌陀佛と稱へて、自分が稱へた功力によつて助からうとする自力の行の南無阿彌陀佛では無い、偏に如來廻向の親心の塊りである、玆の處を頂くのである。大小の聖人輕重の惡人 龍樹菩薩でも天親菩薩でも乃至彌勒菩薩でも此の南無阿彌陀佛の親心一つを頂く時は、自分の等覺の位や初歡喜地の位が間に合ふのでは無い。總ての今迄の自力執心の衣を抜き捨て、此の如來の恵みのみと氣がついて淨土に往生なされたのである。『和讃』に

願力成就の報土には、自力の心行いたらねば、

大小聖人みなながら 如來の弘誓に乘ずなり。

大小の聖者でも淨土に往く時は此の道る瀬無き親心一つを有難いとお頂きなされたばかりである。法然聖人が一代戒を持ち善導大師が何れ丈け念佛を多くお稱へなされても、其の念佛の數、戒行の力で往かうとなされたのでは無い、廣大な如來の恵み一つをお頂きなされたばかりである。此の恵み一つを頂くとは如何なる極重惡人でも此のお慈悲一つで助けられる。此の恵みに洩れる者は一人も無い。惡しければ惡しき程彌々哀れと思召し下さる此の思召しがあればこそ此の極惡深重の私が助かられるのである。此の廣大なお慈悲に氣がつき、此の親の慈悲ならずば自分はこの世も未來も開みてあつたのが此の恵みばかりで救はれるのであると、玆に氣がつき玆に安心させて頂いたのが專修である。先程申した『御文』の歌に「うれしさを昔は袖につゝみけり今宵は身にもあまりぬる哉」う

々々と何彼につけ念佛喜ぶばかりである。其の喜ぶは法然聖人の頂かれた通り「行住坐臥時節の久近を問はず」、寢て居ようが起きて居ようが、南無阿彌陀佛々々々、此のお慈悲ばかりと喜ばせて貰ふのである。喜ばにやならぬと喜ぶのでは無い、此の當てにならぬ人生にお慈悲ばかりと分つて見れば、之を喜ばずに居ようと思つても喜ばずには居られぬ。斯く如來御恩の着物を頂いて、南無阿彌陀佛々々々あら難有や尊やと稱ふる念佛は即ち自分の行ては無く、他力大行の御催促である。其の大行の着物を着せて頂く心持は、あゝ有難い親の御恩である、親の恵みであると、着物着る毎に親の御恩を喜びつゝ着させて貰ふのである。着物着る心は親の御恩を喜びつゝ着るのである。斯く喜びて稱ふる念佛は即ち一聲「が御恩報謝の念佛であります。

一、事多く教へなし、品勝れさまに思ひふかみて、信心にさまぐの色を付ける人あり。

其色どるやうは、慈悲柔和閑靜正直多言無言歡喜善事等也。所謂心しとやかに自ら持ち、閑かにあきなげにものうち云ひて、萬事正直にして而も慈悲あるを信心なりと覺えて、さなき人をば心得難く思へり。

又、かたことまじりの法門、詞多きに語りまじはるを法義者と云ひ、

又、しばたれてものをも云はず思ひありげに見ゆるを深き信者と云ひ、

或は、功德善事をすき好み、慶喜感嘆の姿あるのかみ、眞しき信者と思ひあへり。

是等は皆それらの機々の色なるを、體て信の姿也と思ふは信心と云ふものを知らざりける故也。

信とは佛力に歸して往生を疑はざるを云也。

聖傳

ジャータカ釋尊傳

久遠劫の昔（前號ニ續ク）

群集ジバンカ一佛の言を聞き、大に歡喜して曰く、「隱士スメダは胎宮にある佛陀なり、又佛たるべき幼芽なり」と。かくて彼等は思ひぬ「河を渡らんとする人第一の淺瀬を渡りえざれば、第二のより淺き瀬を渡るべし、我等亦然り、若しジバンカ一佛の世に得道しがたれば、われら、又此未生の佛陀の世にこそ悟るらめ」とて未來に望みをかけて祈りぬ。

ジバンカ一佛此時菩薩を稱讃し八東の花をスメダに與へ恭しく禮して別れたまひぬ。天使も人も同じ捧物をなし、彼に稽首禮拜して歸りぬ。

菩薩は總ての人々退きし後、彼の座より立ち、叫びて曰く「我は必らず大覺を成就すべし」と散りしき積まれたる草の上に蹴跣したり、大千世界の天人等は集ひ來りて讃嘆すらく「貴き比丘スメダよ、先の菩薩等が蹴跣して我は大覺を成ぜんとしたまひし時、あらはれしとひとしき善兆は今も悉くあらはれぬ、必ずや君は佛陀となり給はん、われらは此事をしれり、此等の前兆は誰人にあらはれしやを、君は必らず佛となり給ふなり、君奮激努力精進したまへかし」と、此如きの語もて菩薩をも讃美し、勵ましぬ。

わがめの外にきえしとき

歡喜し、樂しき心もて

樂しし、嬉しき思もて

われ我が座より立ち上り

大歡喜もて樂しくも

大樂をもて嬉しくも

身もおどるほど喜びつ

我は跌座して思ひけり。

無限の樂に默思しつ

我は勝れし力得ぬ。

大千世界にくらぶべき

人こそなけれ、わが得たる

奇蹟の德にしくぞなき。

我座するをば認めけん

大千世界に住める者

聲とてろかせ叫びけり。

「汝かならず佛たらん、

菩薩跌座せし時毎に

あらはる吉兆ことごとく

けふしも我らみとめたり。

金は散りしき、熱やみぬ

今日しもこれらみとめたり。

君は佛陀となり給ふ、

大千世界寂靜なり、

今日しも世の様しかなりぬ。

無上の佛のみことき、

天人も人も歡びつ

「こは胎宮なる佛ぞかし」。

大なるどよみわきたちて

十方世界の天使、人

手をばうちつゝ笑みをもて

稽首し恭禮したりけり。

彼等のいはく。われらもし

此御佛の在す世に

悟りを得ずは彼佛の

御前に又ぞ立つべけれ、

淺瀬わたらん人も亦

此瀬をわたりがたからば

より淺き瀬をわたるらん、

我等もかくぞ此佛を

失はゞまた彼佛の

御前にこそは立つべけれ。」

世に名も高きジバンカラ

我功德をばほめたゝへ

去るべくみあしあげ給ふ、

大衆も亦うやまひて

我を禮して行きにけり、

人や龍神ことごとく我を

禮して去りにけり、

世界の長が衆と共に

必らず君は佛たらん、

大風なきて川止む

これらはけふぞかくなりし。

必らず君は佛たらん、

花は海陸共にさく

けふしも此等花さきぬ。

必らず君は佛たらん、

葛や木々は實りたり、

今日しもそれら實るなり。

まことや君は佛たらん、

寶玉天地にかきやきぬ、

今日しもそれらきらめけり。

まことや君は佛たらん、

天地の樂はなりひびく

けふしも妙音きこゆなり。

まことや君は佛たらん、

色さまの華降りぬ

今日しもそれら地にしきぬ。

まことや君は佛たらん、

大海原はかたむきぬ

大千世界震へけり、

今日しもかれら唸りけり、

まことや君は佛たらん、

地獄に於て大千の

火はことごとくきえらせぬ、

けふしもこれらしづまれり。
まことや君は佛たらん、
水、雨となりふらねども
植物大地に生え茂る、
けふしもこれら萌えいでぬ。
まことや君は佛たらん、
星座はすべてかゞやけり、
天の月舎のツサーカは
月と合してかゞやけり。
まことや君は佛たらん、
穴や洞に住む獸
住處をはなれ出てにけり、
けふしも穴をみすてけり。
まことや君は佛たらん、
人類中に不平なし、
みなことごとく満足す、
けふしも人々快し。
まことや君は佛たらん、
病は散じ飢は癒ゆ、
今日しもかれらかくぞみゆ。
まことや君は佛たらん、
貪欲きえてにくしみも
愚痴の心もほろびけり、
この日これらは散じけり。
まことや君は佛たらん、

危険せまらず、この日こそ
安けくみえしこのしるし、
此あらはれによりてこそ
我等はしりて證すなり。
まことや君は佛たらん、
ちりは少しもたゞよはず
けふしも我等かくぞみし、
この吉兆にわれらしる。
まことや君は佛たらん、
厭しき香ことごとく
散じつくしぬ、天國の
香の大氣めくるなり、
けふしもわれらこれを吸ふ
まことや君は佛をえん。

一、唯後生ずきになり給はゞ自ら心勇み給ふべし。但し後生ずきには
なり王ふべし。法義ずきにはなり給ふべからず。後生をすかば自ら三
信は具しつべし。法義ずきせば動もすれば沙汰者になりてあしきなり、
沙汰のみして日を暮す人多し。あらむ評の此彼にきこゆるも、皆戯論
諷刺の後生沙汰者の仕出せるなり。誠の後世願ひの評ひ出せるなきか
ず。

《惠空語錄》

告白

大悲無倦

向坊久五郎

今日九段の第二求道會に参詣いたさせて貰ひますれば、告白を書けと先生に申されました。餘りに思ひ掛けないこと故非常に躊躇致しました。而しかほどまで御手引下され、斯く迄仕合せの身にして下されたことを思ひますれば、昔の苦しみを引きかへて有り難さの餘りに今は恥しいことを省みませず御述べ致します。

私は筑前の片田舎の百姓の子で御座いまして、家は浄土真宗の門徒で御座いますから、近くの檀那寺には時々参詣します。小間物賣りの同行が毎月十日許り來まして、御慈悲のことをきかせて居ましたので、載かせて貰ひ慰みにして居ました。

中學へ入學致しましてもやはり聞かせて貰ひまするし、卒業する頃にはかつ／＼正信偈だけは載ける様になつて居ましたが、卒業頃は何を根拠としてあんな説教をせらるゝかと考へ出しまして、其の後は何一つとして分る説教はなく、坊さんの悪口をば申す様になりました。其の卒業しました年に貧い家をもかへり見ず、老ひたる父の止めるも聞かませず、東京に來まして高等工業に入學致しました。何分今まで家庭よ

り離れて下宿しました事がないので、郡立の寄宿舎に入りましたが、尙生活状態から娛樂まで變りまして、田園を遠ざかりましたので、東京は淋い處だと思ふにつけて、故郷が非常に慕はしくなりまして、一昨年の六月には大急ぎで歸省致しました。其の時正信偈を拜讀致しまして非常にうれしく賑かに思ひ、この本がないから東京は物足らぬのだと感じましたから、直様之を寫して上京し常に拜讀いたして居ました。登校の途に一つ寺がありまして毎朝正信偈和讃を拜讀なさるを聞きますと、無上の音楽のやうな心地が致しました。

私は前にも申しました通り貧い百姓の子で、物心のつく頃から人の物をとる様の傾向がありまして、之れが爲めに母が非常に心配し叱り付けて呉れましたので、恐いものとは知りながら尙やめられず、隣家の果實など盗むて居りました。小學校に入る頃は身體が弱う御座いましたので氣も細く、先生に戒められ母に叱られますから、小供心にも悪い事致しました後では非常に苦しんで居ました。それ故「公明正大俯仰天地に愧ぢず」の句は私が最も慕ひ、これさへ出來れば心に苦しい事はないとまで思つて居ました。中學で剣道に入りましたのも之れが爲めでありました。此方に來ましてやはり仕て居ました。撃剣をしまして體が強堅になりますと共に意志も亦少しは強くなりましたが、家郷の事を思ひ出しますと常に涙が出相になつて居ました。

昨年の夏までは正信偈も一種の音楽と等しいといふ様な心で讀ませて戴いたので、書いてある事などは氣も付けず、却て修養論の様なものをよく見て居ました、昨年の夏歸省しまし

て家の一年毎に古くなりますことの甚しいので悲しくなり、九月には兄の病中に出發しましたので、故郷には一點の光もないとまで悲しくなり、折角の修學をあだにしてはならぬと思ひますにつけ、益修養の方に心を注ぎました。それ故自室の掃除にも一種の味ひを覺へ、「君は上達しない駄目だ」と申された剣道にも愉快がありまして、決して上達せぬからと不平に思ふた事はありませず、禮儀儀式と云ふ様な方面に意を用ゐました。

今まで寄宿舎では一人の室に居ましたが、昨年の九月には二人の室に入りまして、私と同じ中學の出身者と同居致しました。室代りのときに大切にして居ました例の正信偈の寫本を失ひまして、數日は何んとも言へぬ淋しい心地が致し、人をも疑ひましたが見へぬので、眞宗聖典を求めました。正信偈と淨土和讃初めの六句しか知りませぬ。私には讀む度毎に有り難く常に手をはなれませんでした。

今まで無事に過したました私は、茲に私の室に同居の人を得て非常に苦境に陥りました。今から思ひますれば恐しくも恥しくもあつかましい事でありますが、同君の性質は私とは全く反對の様に見受けられました。非常に締りなく禮儀のない眞面目でない人と見えまして、反抗心の強い、人に服従しない頑固の人だと見へました。私は今まで服従心の全くない人には會ひませぬので此の時は手の付け様がない様に悲しみましたが、日を経ると共に益私の見た判斷が當れりとしか思へませず、毎日欠點あさりをして居る様になりました。而かも同君の欠點の一事は私が助長し作つたのだとは夢にも思ひま

此の頃の心の争ひ筆紙のつくす所ならず候。

毎日に私の心は狂はしくなりますのみで、最早聖教を讀まして載く丈けては物足らずになりました。舍に居ましても本も讀めずになりました。茲に學校での友人にさそはれて偶然求道學舎に參詣の約束をしました。十一月廿八日でありました。私の心は冬枯れの野の様だと申しても未だ足りませず、最早人情も思ひやりもあつたものではありませぬ、たゞ舍生皆我が敵である様の思の致して居りました。時に求道學舎の三時間は何とも申せませず、さながら春の様な心地が致し出来るならば毎日曜にと思ひました。

自分に苦しいと思ひますればこそ、この苦みを取り去りたいと思ひますればこそ、聽聞させて貰ひますが、聞かせて貰つて却て苦しさが増さうとは思ひませんでした。辛じて人のものと自分の物との區別が出来る様になり、政府の邪魔物にだけはなるまいと思つて居ましたのに、初めて承はる講話は極濁惡のものといひ下され、此の苦しい所を出たいからと思ふて參詣しますれば、「現在の境遇に満足が出来ぬ様なものは如何なる處に行つても決して満足は出来ぬ」と申され、衆善奉行諸惡莫作とは常々きいて居ましたのに、「善い事をしても駄目だ、悪いことしたからとてあそるゝな」と申されて見れば、最早私は取りつく島がなくなりました。修養には最も善いと申された剣道に入りまして幾分か効果があつたと思ふて居る失先に、一旦のいかりで最早修養は駄目だ、御法り一つだと小供のときの寺參りの積りて茲に參詣して見ますれば、斯くも手きびしい御教化にあづかりて、私は茲に再び暗に迷

せず、今は自然と互に我を張り合ふ様になりました。

されば不肖も意地として茲に正義忠實の旗を立て同君と忍耐力の競争、意地の立て合ひを致し候て、心靈上に一日／＼と鍋をけづることのあさましく候。殊に精神教育を以て深く不肖のたしなみし剣道に於て、十月三十日深くも忍ぶに耐へぬ恥を受け、無念やる方なく竹刀手にして無念の齒を根も折れよと噛み占めしどなげかはしく候。餘りのあさましさに室に入りて直ちに愛せし件の竹刀を折りすて、茲に不動の精神を得るまではと決心して剣道より身を退き候。

之れは一月十九日に書きまして家の兄に通信しようと思ひまして、當時の狀態を記した手紙の一節であります。正義だの忠實だのやれ不動心だのと申して恥しうありますが、竹刀も折りました位で當時はかく思ひました。更に續けて

一つの樂みつきて一つの樂み起るは自然にて、其の後は少しくうれしかりし聖教に朝夕心をひそめ候へども、凡夫の悲しさには心の戦は日々に激戦となり正義忠實の旗も今は大に破れ候。已の室をも果ては敵地とも思ひひたすら退舍を希ひ候。而し一面には我が寄宿舎に居ればこそ故郷の父兄も心やすく思ひ召され候なれ、今や言葉をつくして相談致すことも父兄には決して御許可なさるまじく、今は涙ながらに斯くはさへ來り候。正義を以て理想と致し候ふ身いかてか不正に同情致さるべき、忠實の旗も進むものいかてか怠慢なるに温情もて接せらるべき。精力のつゝかにかぎり死するまで進まむと致し、時には破られんと致候。

ひ始めました。たゞ學舎に參りまして、御禮致すことだけが樂みと思ふて、一月九日まで參詣致しました。氣狂はしいほどになりました。

私は本年徴兵検査にかゝらねばならぬことになつて居ります。應ずれば合格するについては、今更に一年御心配かけ御骨折しかねばならぬと思ひますれば、昨年九月に國を出立したときの様子がちらついて氣狂はしい心を更に狂はせました。東京で受けやうか國にかへらうかと色々比較しましたが結局分らなくなりました。其の時に思ひがけなく兄に手紙を書いて居ます間に「一層志願に要する金を合格したと思ふて用意して貰つて米國になりとも行かうか」と思ひました。平生は思ひもしませぬのに、窮しますれば飛んだ事までも考へるもので、之を終に細く書き添へて置きました。勿論左様の金があればこんな心配もなく、左程の餘裕のないので私も心配して居りますから、申しても兄の注意を引くことも出来まいと思ふて、二三日の間には左様な事があつたかとも思はぬ位に忘れまして、一月十二日に歸舎しますれば新聞室に重き書狀が兄から來て居ました。親展秘と書いてありました。幸ひ誰も居ませぬので其處で開封して見ますれば、思ひがけなくも「米國に行くならば行け」と云ふ文意で非常に細々と書いてありました。達者になつたと云ふ手紙は受け取り、萬々承知致して居りますが、讀み行く内頭は熱して來ますし眼はくもりするし、病床の兄が見える様な氣がしますので早やもう何とも申せなくなりました。人の居ぬのを幸ひに泣き伏しました。一度では夢の夢とも思へぬので更に又更に、讀

みました、文意は間違のないのです。又例の手紙の文を出
しませう。

米國に行くならば行けとの文拜見して心に浮び候は抑へ難
き雄心か、非ず、溢れ出づる嬉しさか非ず、慕ひし彼の國、
行きなければこそ申し候へども、御許可候ては不肖の身の
かゝる處に赴くべき資格なきことにて、此の一種言ふべか
らざるおそれは、望のかなひたるうれしさを抑壓致し候。
英語の出來ること、實力のなきこと、生活力の乏しきこと
等不肖の無智無能なる事連綿として襲ひ來り、遂に一代の
嬉しさをしるが如くに消へ失せしめ候。

かゝる無資格のものに向つて、「米國に行け一大決心を以て
同意する」てふ御文拜讀致しては、たとひ兄弟とは申せ其
の御慈悲の泉の底、とても不肖の想像の及ぶ所にあらず存
ぜられ、とても人の限ある愛情にあるまじく、大悲の如來
の御手まはしと思はざるを得ず候ひき。

私は竹刀折つたとき、今迄力とせる修養の杖と同時に折れて
忽ち迷ひ出しましたときも残念でしたが、今私の意志一つで
右にも左にも自由になる様に思へました此の米國行きが、私
の不勉強のために出來ないのだと思ひましたとき程残念なこ
とはありませぬでした。今までは自惚れて居たが今日はいよ
／＼瓦の身だと痛切に思ひました。而し私はそれよりは兄を
あざむいて居た心苦しさ、何も知らぬ兄が可愛相となりませ
んてした。手紙の度毎に勉強して居ると申しまするが果して
勉強して居るか。手紙より外には私の様子を知らぬ兄は、や
はり私を勉強して居ると思ふて居るのか、己れさへ骨を折れ

意見を戴きました。先生は各方面から充分承知の出來る様に
丁寧に説諭して下されました。此の時も仕合せには渡米した
いとは思ひませんでしたから先生が懇に止めて下さるゝのが
一々胸にしみ渡りました。早速其の夜之を認めて國の兄に送
りました。餘りに長くなり申するが有り難いから御説諭の一
部を出させて貰ひたいと思ひます。先生は最後に次の様に申さ
れました。

「君は本年二十四歳であるとするれば向ふ六ヶ年間は少くも
彼の地に留まる理であるが、六十二三歳にもなるゝ父母
を郷里に残して行くは子として善からうか悪るからうか。
勿論父母は壯健であらふ、今五年や十年は壯健であらうと
信ずるが、老父母を國に残して三千里の外に出て孝養を親
しくし得ないのは子としてどうであらうか。他日大成する
も孝の大なるものではあらうが、留りて親しく孝養するの
も亦子としての勤めではあるまいか。大なる希望には大な
る犠牲を拂ふべきであらうが、清い情操にひかれて此の希
望をしばらく抑ふるのも亦香しいとは思はぬか。殊に充分
實力をつけて他日の機會を待つのも亦よくはないか。殊に
米國に行かねば男が立たぬと云ふてもなければ、内地では
將來の發展が望まれぬといふことでもあるまい。却て君の
今日では之と反對の現象もあるかと思はるゝ様である。
私は此の教がありますれば米國に行くよりも却てよいかとも
思ひます。親々と終始申しまするが、實は親も兄弟も忘れて
居りましたのだと私は恥しく思ひます。

次の日曜に求道學舎に参りましたして伺ひたい事があるからと

ば久五郎は米國にても行けるものと思ふて居るかと思ふて見
ますと、私の罪の深きことは極悪と申されても尚つくされ
ぬ感が致し、覺へず知らず窓前の雨をながめて御稱名をと
なへました。しばらくは座して居ましたか涙も出なくなり泣
程有りがたい事でもない様に思ふて、状態に巻き入れて室に
かへりました。而し何だか頭が非常にかるい様なすが／＼
した心地の致して居ました。久しく痛みて居ました腫物の口
が俄かに破れて、膿の去た後の様な心持が致しました。室に
かへりて見ますれば同居して居ます人は机の前に勉強致して
居ました。而し一目同君を見ましたときは何故か顔を見らる
ゝのが恥しい様な、同君を見ると何故かなつかしくあはれな
心地が致しました。(腫物の痛むときには誰のなさるゝ事も
氣に入らず、立腹して居ました小供が、今は膿が取れてすが
／＼しくなり申するが、尙恥しくて母や姉に心配し遠慮して
居るとしますれば、正しく私の此の時と同一だと思ひます。)
されど私はなつかしい様な氣も致しますが、直ちに仕度を取
りまして此の室を出ました。嬉いけれど不思議な様に思はれ
て居ました。廊下で折り悪しく平素私もへだて、居た人に會
ひましたが、「久ちゃん」と呼びかけられて見ますれば、先刻
まではさらはしく思ふて居ましたのに、何だか故郷で伯母さ
んななどによばれた様な心地が致しました。何でも變だなあ
と云ふ思ひばかりで、米國に行きたいのいや残念だのとは其
の頃は全く思ひ出させず、變だと云ふ思ひのみて其の日十
二日も終りました。翌十三日には手島先生に御面會して、兄
の手紙と此の手紙の來る様になつたあらましを申しまして御

申しますれば、それでは今夜來いと申されましたから、一月
十六日の夜伺ひまして悉皆御話致しました所「それが大悲の
親心の知れたのだ」と申されまして見ますれば「うれしさを
昔は云々」と申すよりは「ありがたさを昔は云々」と申した
方が私には適切な様に思はれます。あらありがたや勿體なや
南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

初めて求道學舎に参詣しましたのが十一月廿八日であり、
今日がまた一月十六日にはからずなつて居りますが、此の出
來事の何でも偶然でない様な心地がいたしました。おそれ多
いことではありまするが、私の身を守り下さるゝ親様の御方
便の一方ならぬのに驚きました。「種々に善巧方便し」と申さ
れた御慈悲と御苦勞とに氣つかせて貰ひまして、たゞ／＼有
りがたく思ひ、親不孝者とは私へのよび聲であるのに氣づき
まして、慚愧にたへぬ仕合者として貰ひました。

而し残念なことには、斯かる有り難いと思ふ心はまたうす
らぎました。斯く仕合せの身にして下されたについて同室の
君や同舎の方々は最も大切な、最も御恩のある人々だと思ひ
まするが、此の人々に對して一向頭が下らぬ計りてなく、御禮
を申さぬのみでなく、却て仇をなして居ります。やめようと
思ひましても尙やめ得ないので御座います。騒々しいだの、
不規則だのと勝手の名目の下に尙うらみ申して居ました。再
び退舎しやうといふ思が致して、三月頃は其れが極端になつ
て來ました。遂には兄にも近日内に退舎するかも知れせん
と書いて送りしました。退舎について荷物をしらべ出しました
丁度手紙の故郷に着いた頃で御座いました。夜具を見ました

ときに驚きました。今まで着物が粗末だとは思ひませぬでしたが、三年間手入もせぬ夜具が非常に粗末になつて居ますのを見まして、之では舍の門を持ち出す勇氣はない。それかと申して新に作ることは尙更出来ませず、また残念だと思ひました。其の外にも舍生に借用したものなど見付けまして、再び悪しくなりて只今までの不平もなくなりました。私は舍を出やう、出たら善からうと思ふて居りましたが、荷物を持ては決して出れない身だとしみ／＼氣つかせて貰ひました。寄宿舎なればこそ此の夜具でも笑ひてなく、舍生ならこそ私に此の目ざまし時計をかし此の本をかり下さると思ひますれば、自分てこそ心をへだて、居れ、舍生は斯ほどに親切であると思ひますれば、ばづかしい、はづかしいと思ふ外はありませぬ。煩惱障眼雖不見大悲無常照我」と示され、「無明長夜の燈炬なり、智眼くらしと悲むな」と申されたのも今は人の身の上だとは思へませぬ。斯くまでも心強く頑として逆縁中の知識となり下されました同居の人、同舎の人々に對して、とても御恩報じは出来ないとおそれ居ます。「惡性さらにやめ難し、心は蛇蝎の如くなり。」「小慈小悲もなき身にて、有情利益は思ふまじ」と心の奥まで見通されて手厳しい御戒を蒙りましたは、たゞ仰のまゝに稱名念佛で日暮させていたゞくばかりで御座います。

徴兵検査は四月廿一日に茨城縣笠間で受けさせて頂きました、見事合格致しました。今は佛の御みちびき下さるゝ所は何處でもついて行きますと御手引を辱しけなく頂く外はありませぬ。一年志願もさせて下さるゝ様に兄から通知が来すし

て、今は何から何まで厚く御廻向して下さるゝ御慈悲に感泣もし得ませず、あさましくも悲しくも無慚無愧の日暮しをし居ります。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。(五月十四日)

●佛遺教經講話

前田 慧雲 師述

本書は教界の碩學前田博士が、昨夏神戸佛教青年會の講義により佛院最後の遺訓たる佛遺教經を旬日に亘りて専ら通俗的に講述せられたるものである。其の叮嚀懇切な事は、聖訓の一言一句をも讀者の心に徹底させて止まぬといふ態がある。猶ほ處々に博士の穩厚典雅の語風が躍動して居て、實に慕はしい。吾人は佛教家庭に於ける近來の好讀みのものとして、江湖に推薦するものである。

發行所 神戸電光社 定價金六拾錢

本誌本號非常の延刊と相成り申譯無之平に御詫び申上候也

求道發行所

雜 錄

如來は慈父母也

近角常觀

如來爲一切
當知諸衆生
世尊大慈悲
如人著鬼魅

常作慈父母
皆是如來子
爲衆修苦行
狂亂多所爲

此文は、私の懺悔録の初めに、掲げたもので、涅槃經に於ける、阿闍世王入信の時の、讚嘆の偈頌であります、私は此偈を以て、聖人の信仰の、告白として、讚仰して措かざる次第であります、而して常に私が、申す通り、阿闍世が、煩悶して入信したる有様は、全く私が實驗其儘を描かれた様に、感ぜられます、涅槃經に、佛將に入滅したまはんとするに、阿難を初め一切の佛弟子、泣きて涅槃に入りたまはざらんことを、請ひたてまつれども、佛更に、聞き入れたまはず、最後に至りて「爲阿闍世王不入涅槃」と宣へり、これを譬ふるに、親命終せんとするとき、其枕頭に集り来る善良なる子弟の事は、心配せざるも、放蕩漂浪して、其居所の明らかならざる窮子のことが、念頭を去らざるが如くである、佛四十餘年の説法の後、入滅したまはんとする時、尤も憂とする所は

佛陀の大檀越頻婆娑羅王たる父を、殺し母韋提希夫人を、幽閉し、提婆と共に、佛の教團を、破壊せんとしたる、阿闍世王の、未だ佛の慈悲を感ぜざる事である、實に是れ罪惡深重、煩惱熾盛の者を、悲憫したまふ、本願醍醐の妙藥のあらはれ来る機會である、而して佛、かくの如く阿闍世王を、憐みたまふ時が、恰も阿闍世王の煩悶、其極に達して、悶絶して地に倒れつゝある時である、其如來大悲の導師阿闍世王の爲に、月愛三昧の光明を、放ちたまひ、其光明清涼にして往て王の身を照すに、病忽に癒えた、此時耆婆阿闍世王に語りて曰く、如來先づ、此光を放ちて先づ王の身を、治して、然して心に及ぶと申した、常に私が懺悔し、且つ感謝することであるが、私が入信した時が、正しく此通りであつた、煩悶の餘病を起し、病癒えて間もなく、心中如來の大慈大悲の心光を感じて、恰も白雲青空の間に、身心瀟灑する心持を以つて、和融、柔軟の世界に蘇生した、實に返す／＼も阿闍世は昔の阿闍世王ではない、現在の私自身である。

此に至りて「爲阿闍世王不入涅槃」とある佛語を、涅槃經に於て、甚深の密義ありとて、示したまひしを、味はねばならぬ、「曰く、爲と言ふは一切の凡夫、阿闍世は、普く及び一切五逆を、造る者なり、又、爲とは、即是一切有爲の衆生なり、我終に無爲の衆生の爲めに、世に住せず、何を以ての故に、夫れ無爲は、衆生に非る也、阿闍世は即ち煩悩を具足せる者也」とある、してみれば、阿闍世は、即二千餘年の末代の煩悶、懊惱せる私自身のことである、そして私が遂に、亦阿闍世王同様に、如來の慈光に、接することを得たの

は、釋尊色身は、滅したまふと雖、法身は滅したまはず、如來は常住の御光を以て、遂に私を導きたまひて、大悲本願の醍醐を、味はせて下されたこと、今更の如く、ます／＼喜ばせて頂くのである、善導大師般舟讚の言は、直に以て私が心中の告白である、曰く、「敬て一切の往生の知識等に、白さく、大に須らく慚愧すべし、釋迦如來は、實に是れ慈悲の父母なり、種々の方便を以て、我等が無上の信心を發起せしめたまへり。」

かく涅槃經、阿闍世王の狀態、即ち私の實驗の直寫なりとは、私が直ちに涅槃經、より味ひ來りたのではない、申すまでもない、親戀聖人信卷末の終に於ける、涅槃經引用によりて、知らせていただいたのである、私が入信は、實に明治三十年である、而して御本書を、熟讀し始めたは、明治三十五年歸朝の時、已後である、而して恐れながら、此涅槃經の阿闍世王煩悶の文字を、長々と引用したまふは、聖人が、御實驗の告白の直寫として、教示したまふたのであらう、夫故此文の始めに、御悲歎の文がある、曰く「誠に知ぬ、悲哉愚禿戀愛慾の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず、恥すべし、傷むべし矣」と、是即ち般舟讚の所謂「大に須らく慚愧すべし」である、而して阿闍世王の爲めに、耆婆説て曰く「諸佛世尊常に、是言を説きたまはく、二の白法あり、能く衆生を救く一は慚、二は愧なり、慚は自ら罪を作らず、愧は他を教へて作らしめず、慚は内に自ら羞耻づ、愧は發露して人に向ふ、慚は人に羞づ、愧は天に羞づ、是を慚愧と名く云々」此慚愧

の起るのも、畢竟、如來於哀の善巧が屈いたからである、信卷別序に「眞心を開闡することは大聖於哀の善巧より顯彰せり」とあるも、和讃に「大聖の／＼もろともに、凡愚底下のつみびとを、逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり」とあるも畢竟、如來甚深、實語、善巧句義の親心を、阿闍世王が、味はふて見せて此の愚禿を初めとして、五逆十惡を、造る我等に、與へたまふ種々の方便である、今涅槃經の文に、世尊大慈悲衆の爲めに苦行を、修したまふこと、人の鬼魅に著せられて、狂亂所爲多きが如しと仰られたも是れである。總序や、略文類に「是を以て、淨土の縁、熟して、調達、閻王をして逆害を、興せしめ、濁世機、憫みて、釋迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり、情々彼を思ひ、靜に此を思ふに、達多闍世、弘く、仁慈を施し、彌陀、釋迦深く素懷を顯せり」とあるは、この大聖於哀の善巧を、感謝したまふたのである。

此大聖の善巧の、やるせなき御思召が、知れた一念には、懺悔の心、必らず起り來たるのである、悲歎の御文と、歎異鈔第九章の御文とは、何れも聖人の御自督を、述べたまへる同じ意味の御文である、「念佛申し候へども、踴躍歡喜の心、おろそかに候」とは、定聚の數に入ることを、喜ばぬのである、いそぎ淨土へまゐりたきこゝろのおこらぬは、眞證の證に、近くとを、快まぬのである、「親戀も、この不審ありつるに、唯圓房おなじこゝろにてありけり」とあるによりて喜ばすとも快まずともよいと、邪見に陥りてはならぬ、「よく／＼案じみれば天におどり、地におどるほどに喜ぶべきことを、喜ばぬ」

と仰せられたは、既に慚愧の言である、「久遠劫より流轉せる、苦惱の舊里は、すてがたく、いまだ生れざる安養の淨土は、こひしからず、候こと、まことに／＼煩悩の強盛に候にこそ」とは、慚愧の御言葉である、かく言へばとて、喜ばぬを、苦にするのではない、「佛かねて、しろしめして、煩悩具足の凡夫」と、仰せられたのである、此佛の御言葉は、「阿闍世は即是煩悩を具足せる者也」とある涅槃經の御文のまゝである、「いそぎまゐりたき、こゝろのなきものを、殊にあはれみ、たまふなり」とは、信卷に「難化の三機、難治の三病は、大悲の弘誓を、憑み、利他の信海に歸すれば、斯を於哀し、斯を憐憫して、療じたまふ」と、あると同じ意味である、かく頂き來れば、歎異鈔第九章は、信卷引用の涅槃經の、延書にして、聖人御自督の、懺悔告白といたゞ次第である。

最後に至りて最も新に、知らしていただいた聖人の御實驗の傍を、偲ふべき御眞蹟、二、三を紹介しようと思ふ、即ち劈頭に掲げたる涅槃經の偈を、私が特に、注意するに至りたる因縁は、我が慈父が七年前に示寂したるとき、御聖教の帙の裏に、聖德太子の、磯長廟中の、二十句の偈と共に、此涅槃經の偈が、書いてあつたが、本である、而して後にて是が聖人の御製作にかゝる、特別の聖德太子奉讃の奥書で、あることが、分つた、これを以て、此偈頌が、特に聖人の御自督であることを、知つたのである、偈に「如來爲一切、常作慈父母」云々とあるは即ち、普通の聖德太子和讃に「大悲救世聖德皇、父の如くにあはします、大悲救世觀世音母のことくにあはします」と、同じ意味である、此特別の聖德太子奉讃の

眞筆は、高田派一身田本山に、藏してあるのである、しかるに惜哉、其本には、此奥書がないのである、而して私が此奥書を見たのは、古き刊行本である、してみると、たしかに此特別の聖德太子奉讃の御眞筆の異本が、存してあつたに違ない、今回本派本願寺蒐覽會に、陳列してある、和泉國具塚願船寺所藏の

墓所を點しおはりにき
われ入滅のそののちに
四百三十餘歳に
この記文は出現せむ。

佛法興隆せしめつゝ
有情利益のためにとて
かの衝山よりいてて
この日域にいりたまふ。

上宮太子とまふすなり
つのにわたのへの東の
樓のさしのうえに宮あり
今その御所にまします
ゆへに上宮太子とまふすなり。

厩屋門の皇子とまふしけり
皇后御まやに御遊あり
けるに、そのところにしてむまれ

させますによりて、むまやとの皇子とまふすなり。

等の四首及び周防國德應寺所藏の「往昔夫人とありし時。釋迦牟尼如來ねむころに、勝鬘經を説きたまふ、その因縁の故なるは」の一首は此和讃眞筆の断片である。而して未だ其眞筆たる磯長の二十句の偈、及び此偈の眞蹟は、見當らぬ、若し知れる人あらば、知らして貰ひたい、そして、今年春、加賀大谷派専光寺に、二十句偈中の、八句の眞筆が、あるのを拜した、それは、太子奉讃の眞筆の断片でなくして、長閑法眼の筆の太子御像添書の、銘文である、これによりて二十句の偈を、聖人が特に尊崇したまひしことは、明らかにたつて大に満足をした、されども、他の一半たる涅槃經の文の眞筆を、未だ見奉まつらなんだ、しかるに、蒐覽會に出てある、名號の中に珍らしき、御眞蹟がある、即ち京都市下間九鬼三郎氏所藏の、九字の名號である、其下の銘に、此涅槃經の「如來爲一切云々」の八句の眞筆がある、而して其上の銘は、珍らしくも、第三十三の願「設我得佛十方無量不可思議諸佛世界衆生之類蒙我光明觸其身者身心柔軟超過人天若不爾者不取正覺」即ち觸光柔軟の願の、眞筆である、此名號は、上來述ぶる所の、聖人實験の總體の直寫である、抑々九字、十字の名號夫れ自身が、聖人實験の如來であることは、疑ない、愚禿鈔に、「二河譬の西岸上の召喚の勅命の「我能護汝」、を釋して、我の言は、「盡十方無碍光如來也、不可思議光佛也」とあるのて明らかである、而して此京都市下間九鬼三郎氏の所藏の、九字の名號は、上下の銘で遺憾なく信卷末に御示ある聖人の御信

時報

自督餘錄

○母の病氣を見舞ひたるを御縁として、我門徒をはじめ近隣の人々に御慈悲を話して、皆々ひとときは氣のついた人が多かつた、そこで此度は歸京の道すがら、病氣の人々を尋ねて共に御慈悲を喜ばしていたゞかうと決心した。

○先づ我が中學時代よりの親友梶井研九君を尋ねた、同君は二十七八年間渝らざる斷金の友である、今春已來心臟病にかかりて静養せられつゝあるをきいて尾張なる君が寺を訪ふた、同君を初め一家の方々天に踊り、地に躍らんばかりの喜を以て迎えられ、何んと應へてよきやら分からぬ、相顧みて唯感謝の念佛あるばかりである、

○同君の寺を訪ふことは是で前後五度である、而して其二度目は懺悔録にかきておきた我煩悶中に尋ねた友人は實に君である、考へて見れば今より十五年前、中夏炎天の空に夏草の生を茂りたる堤を内外身心の熱のために苦しめられつゝ、全

仰を顯はしてある、即ち眞の佛弟子とあるを釋して、先づ觸光輕柔の願が、擧げてある、身心柔軟超過人天たる入正定聚の聖人の、御實験である、而して阿闍世王の入信の涅槃經の文中、「爲阿闍世王不入涅槃」密語を、解し了りて曰く、「如來密語、不可思議、佛法衆僧亦不可思議、菩薩摩訶薩亦不可思議」、大涅槃經亦不可思議とありて、次に、月愛三昧の光明の照觸によりて、阿闍世王が身心癒治する次第である、そして大谷派坂東報恩寺所藏教行信證眞筆に、此四度の不可思議の文字には雌黃を、施して聖人が深き注意を與へたまふのである、是れ即ち南無不可思議光如來の御姿にして、上なる觸光柔軟の願は、其實験を示し、下なる如來爲一切云々の八字は、正しく其願心即ち慈悲の父母の、親心を、示されたるものにして、全く聖人内心實験の一幅の、眞圖と仰ぎ奉る次第である、頃者京都求道會の同人諸君、道光三週年紀念の、爲めに文を、徵せらる、乃ち特に此一篇を草して平素の、所信を、披瀝し諸君と共に、三垢消滅し、身意柔軟の光照を、感謝し奉る次第である。

道光明朗超絶せり、

清淨光佛とまうすなり、

ひとたび光照かむるもの、

業垢をのぞき解脱をう、

南無阿彌陀佛

追記 聖人が釋善蓮へ下されし、和讃及經文、及往還廻向文、類の御直筆の寫を拜見せし所、特に此涅槃經偈をも明らかに、秘書したまひてあり。

身に汗して累々として君を尋ねた昔が想ひ出される、其時の蘇鐵もある、道路も昔の儘である、山も山、路も昔にかはらねど、かはりはてたる我心かな。

○友人は胸を打明けて話さるゝにはいよく「心臟病と分かつたときに萬一のとがあつたならば君によろしく言ふてくれ、御蔭で大に御慈悲を喜ばして貰ふて御恩の程が難有いとは申置きながら、何んとやらん君に尋ねたいと欲ふて居たに、態々來てくれたのは嬉しい」とて倍申さるゝには、歎異鈔の九章はかぬて承知して居るものゝ、實は病氣にてもなつたら其時こそは何事もさしおきて御念佛も出來るであらう、喜ばれるであらうと思ふて居たが、事實は正反對である、また自分の信友の村長が村治の爲に力を盡し椅子に凭りながら心臟破裂して其職に斃れた、又清澤師が病軀を提げて粉骨碎身されたことを考へると、自分の如きは醫者から讀經も説教も禁止されだからとて、おめ／＼身を掛きて日暮をして居るは何んとなぐ氣がすまぬ心持であるが如何であるかとの尋である。

○そこで尋ねられた私が却て友人によりて大なる教を得た、如何にもそうであらう、病でないときは病氣にてもなつたら喜ばれるであらう、病氣になると、病氣がなかつたならば喜ば

れるであらう、つまり何時も喜はれぬのである、喜ぶべき心を
おさへてよろこばせざるは煩惱なり、死なんずるやらんと心
細く覺ゆることも煩惱の所爲なり、よく／＼煩惱の強盛に候
にこそとはこの事じや、御同様に病氣になつたら念佛三昧に
なれるであらうなどと思ふのが自分を貫ひかぶりて居るのじ
や、しかるに佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せら
れたがこゝじや、喜ばうとか、職に罷れねはならぬとかいら
ぬ心配するよりも、よく見抜ゐて下された御心に遠慮なく安
心さして頂くのじや。

○かく頂かして貰ふた一念が娑婆の終、臨終じや、君生きて
居ると思へばこそ、いらぬ娑婆氣が離れぬのじや、散る時が浮
む時なる違かな、君、信の一念に既に一たび死んだのじや、いら
ぬ、きみを出すじやない、殘餘の此身體は佛様より預けられ
たのじや、大切に養生するのが病人の務じやと申したら、門徒
の人が傍より申さるゝには如何にも左様であります、たとひ
平臥にても思さへ通ふて下されば何より難有い、たゞかくし
て御病中に御慈悲を喜んで下さるのが何よりの御教導じや。

○友人にも善知識の御教化を繰返して共に喜んで貰ふた、而
して「散る時か浮む時なる違かな」の御句は今迄臨終の事と

のみ思ふて居つたが、此時初めて前念命終、後念即生の思召
であることを悟つた、實に悟りが遅かつた、此度は徹頭徹尾
善知識の御教化に一人氣附かせていたゞきて實に難有き極み
である、親の病氣や、友人の病氣が私へ對しての御知らせと
唯々仰ぐばかりである。

○此次は美濃の土岐津なる丸茂夫人實母の病氣を見舞ふた、
平素より聞法篤信の人であつた、しかるに此度は俄に病氣で
本復が六ヶ敷きゆへ、夫人が何よりの親への妙藥をと私に來
て呉れとの希望であつた、又母御も病苦の中から私が來たら
／＼と待受けて下さつた。

○到着するや否や、何はさてをき、病床に臨みて善知識の御
教化を取次ぎて御話をした、そして尾張友人の病中所感を話
をした、所が母御の申さるゝは私も全く同様じや、喜ばれぬ
なぜ此様に邪見になつたであらうとの敷きであつた、そこで
前念命終、後念即生を御話して平生業成の難有きことを話し
た、平生業成といふは平生御慈悲をいたゞきあげば病中にて
も勇ましく喜べてゆけるといふことではない、たとひ病苦の
ために喜べずとも平生にいたゞいておけば、往生一定じやと
いふことじや、そこで歎異鈔をとり出して拜讀した。

○曰く、彌陀の光明にてらされまゐらするゆへに、一念發起
するとき金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚のくらゐ
におさめしめたまひて命終すれば、もろ／＼の煩惱惡障を轉
じて無生忍をさとらしめたまふなり、乃至たゞし業報かぎり
あることなれば、いかなる不思議のことにもあひ、また病惱
苦痛せめて正念に住せずしておはらんに、念佛申すことかた
し、そのあひだのつみはいかゞして滅すべきや、つみきえざ
れば往生はかなふべからざるか、攝取不捨の願をたのみたて
まつらばいかなる罪業をおかし、念佛申さずしておはるとも
すみやかに往生をとぐべし。

○此御文を讀みつゝ初めて氣がついたのが、命終すればの一
句である、今までは下につけて、命終すればもろ／＼の煩惱惡
障を轉じて無生忍をさとらしめたまふなりと讀みたがこれは
誤であつた、すでに定聚のくらゐにおさめしめたまひて命終
すればであつた、平生一念發起するときは、はや命終じや、平
生の時善知識の言の下に歸命の一念を發得せば其時を以て娑
婆のおはり臨終とおもふべしと、病床に臨みて讀まして貰ふ
て自分が初めて氣がついた。

○病人は随分病惱苦痛が多いらしい、念佛の申しにくいも無

理はない、横川法語に、信心淺きけれども本願ふかきがゆへに
たのめばかならず往生す、念佛ものうけれども、稱ふれば必
ず來迎にあづかる、功德莫大なるがゆへに、このゆへに本願
にあふことをよろこぶべし、と仰せられたはこゝじや。

○しかるに不思議なるかな、佛前に聲をあげて勤行する間は
病惱中にもやす／＼と眠られる、休まれる、到着の晩はきこえ
る様に勤めたが、翌朝は若しや眠をさましてはときこえぬや
うに勤めたがりんのきこえる間は亦休まれたとのこと、ア、
これ見てもわかる、煩惱にまなこさえられて、攝取の光明みざ
れども、大悲のうきことなく、つねにわが身をてらすな
り、大悲の願船に乗じて光明の廣海にうかびぬれば、至徳の
風靜に、衆禍の波轉ず。

○大悲は船じや、光明は海じや、この病室が願船じや、前裁
は光明の海じや、船にのりた己上は氣兼ねるのはいらぬこと
じや、船にのりた己上は時節さへくれば彼岸に到着するのじ
や、大悲の願船には清淨の信心を順風とするのじや、至徳の
風靜かに、衆禍の波轉ず、心配せずとも、ちやんとよくして
下さるのじや、もろ／＼の煩惱惡障を轉じて無生忍をさとら
しめたまふなり。南無阿彌陀佛。

○老母はいつの間にか苦もなく安心された、蓋のとれたやうなものじゃ、もはやたゞ／＼頷かるゝばかりであつた、弘誓のふねにのりぬれば、大悲の風にまかせたり、まるで親に抱かれた赤子の如くなられた、此御縁で初めて歎異鈔の命終すればの御文まで氣附かせて貰ふせた、觀經の廓然大悟得無生忍は、韋提夫人の現在身の上じや、喜悟信の三忍の味はこゝじや、一週間の後病革まりて安らかに往生を遂げられた、與韋提寺獲三忍、即證法性之常樂、南無阿彌陀佛

○中泉町に立寄りて亦御同朋の病を尋ね篤信者佐藤氏の催によりて同地大谷派説教場に於て講話をした、同氏の息清一郎氏は高等工業在學中常に求道學舎に來聽されたのである、説教場は極さゞやかなものなれども、其創立開場式の當時嚴如上人が御孫即當御法主臺下とともに越後御巡化の歸道に御臨場あらせられたとのこと、四疊半に三疊位の居間は其時に御入りなされた室と承りて覺えず森嚴の感に打たれ、當時私は京都にありて御出發を御見送り申したことを思ひ出して追憶の情止みがたかつた。

○嗚呼考へ來れば此四月四國の御駐錫傳道より引續き一旦江湖へ歸りて母を伴ひて京都に上り、嚴如上人十七回忌の法要

に參詣して、母は親しく椽儀を拜して感泣止みがたく満足され、私も其盛儀を拜し亦御満座の、如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報すべし、師主知識の恩徳も、骨をくたきても謝すべし、の御和讃を拜聴して感泣止みがたかつた、翌日御親教を拜聴し引續き母と共に大門上棟式を拜して、恰も今より三十四年前私か父に連れられて得度に上京したる時、恰も此門の上に安置せらるゝ嚴如上人御直作の三尊佛の開眼式のあつたことを想ひ出し、檀林寶座より上人の御宿願の實現されたのを御覽なさるゝ御満足を仰がずには居られなんだ。

○特に翌日光養殿の御禮始は將來我等及子孫が御教化を蒙るべき有縁の善知識にてましますことを思ふて感謝止みがたかつた、母の満足愉ふるに物なし、大學寮講堂に於て眞の知識の題にて祝賀演説を爲し、且つ各地の御同朋に遇ひ、特に石見の木村師御夫婦はわざ／＼東京に御出であつたが、京都にて度々御目にかゝつた。

○感謝と満足とを以て母と共に出立し、陣岐洪範君は私と同車して錦織寺の御法主に御遇ひにゆくとて野洲にて下りられた、私は母と分かれて大垣にて下りた、恰も東宮殿下が演習地へ御出向の爲に乘車なされた、京都から下向の同行がア、親

同二十九日ヨリ七月三日迄

佐 渡

七月四日ヨリ九日迄

信州飯山地方上越針村

同十日ヨリ廿四日迄

越後、山形、秋田、仙臺
地方御駐錫紀念傳道
大日本佛教青年會講
習會、三河大濱、歸國
神戸等

同廿七日ヨリ八月四日迄

八月七日ヨリ十三日迄

鹿兒島講習會

同十四日ヨリ廿三日迄

琉 球

同二十四日ヨリ二十八日迄

九州各地

●佛教通觀附 佛教修養談

蘭田宗惠師述

本書は眞宗本派佛教大學長蘭田宗惠師が河内佛教講演會にて講述せられたる筆録である。標題の如く浩瀚なる一代佛教々理の精髓を氏が該博なる識見に基づき、幾多新しき泰西人の研究事例に照し、極めて平易明快に何人にも呑み込み易く秩序正しく説かれてある。而も其間に能く蘊奥が盡されてある。殊に最後は親鸞聖人の絕對他力に極まる旨を懇切に示されてある。佛教々理研究に志ある初學者には確かに良指針である。猶ほ附録として師が修養談十席が添えてある。『發行所、京都興教書院 定價廿六錢』

様から親様へ、有難い／＼と感泣して居る、そして私の顔を見て近角先生で御坐りますかと挨拶する、美濃高須に於ける有縁の御同行であつた、其汽車が進行すると豈圖らんや恰も其汽車に錦織寺御法主猊下が御乗りあらせられた、○私はかねて昨年已來度々招を受けた美濃笠郷村専了寺方に参りて二日間講話をした、同住職は全く名聞を離れて御慈悲を喜ばるゝ方である、如來は慈父母也の文章は其時に書いたのであつた、能戸得一君と佐竹政次郎君が尋ねて來て下さつた、かく御慈悲を喜びつゝ歸京したのは四月二十三日頃のことであつた、そして母は歸國の後間もなく病氣が出て遂に五月三日恰も入谷の金森師方の講話を終りて歸宅して、萩野兄が朝吹氏所有の聖德太子の古書に二十句偈の八句を題せるを見出し、頻りに感歎せられつゝあつたとき、母の病氣篤しとの報に接した次第であつた、嗚呼今年は色々善知識の御教化を喜ばせていたゞく宿因まことに窮盡し難き次第である。南無阿彌陀佛。

夏期傳道略定

六月二十日ヨリ二十四日迄

若松求道會

同二十六日ヨリ二十八日迄

新 潟

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しく、
 皆嚴格なる實行の必要を感し、於て一般に道義の制裁弛み去りて
 ざるものなる、確實なる信念を鑿まんとして胸中幾多の理想を實現せ
 る、社會實務の人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼、
 信仰の饑渴、現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實
 なるは未だ嘗て見ざる所也。
 昨年の企て、聊か此の時運の必要に應ぜんとする微志あり、先
 輩の道を行はしめ、人々の寄宿に充て、一方に寢食を同じくし、共
 實賤躬行に勉め、また一方には日曜講演を開きて眞面目なる
 人々と共に心を潜めて信仰の問題を講じ、互に心靈の修養に
 従ひしが、幸に佛陀冥祐と師友同情とによりて其期する所空
 し。此に於て、學問は狹隘を訴へて幾多の申込に負き、餘地な
 を擴張し、會館を設立して懇切なる道人の勧告に従ひ、學舍
 に篤實なる先輩の指導に従ひ、忠實なる親友の贊助を仰ぎ、幸
 實なる實行により、漸次其結果を挙げむことは實に不肖の至
 願也。
 從來首都に於て佛教徒に屬する會館の設なく、其不便を感ず
 る事一日の事にあらず。而して屢々計畫せられて、未だ容易
 に實行の緒につかざる所以のもの、蓋し其規模大にして完
 全を期すればなり。故に先づ現時の必要に應ずべき適宜の會
 館を設立して、漸次其大なるものに進まんことを欲す。是先
 づ本會館の建設を企圖し、佛敎者一般の需要に充て、且つ清
 なる社會の中心に供せむと欲する所也。幾多の社會の施設を
 年會の組織と會館の設備等と初るとも、我佛敎者の手に成ら
 詳細調査し來りて、此等の事業の如き若し燎原の一點火たる
 得ば幸之に過るなし。本會館建設の如き若し燎原の一點火たる
 察せられ、協力贊助し玉はらむことを、謹て白す。
 明治三十六年十月

發起者 近角常觀

求道會館設立喜捨金
受領報告

遠江	東京	東京	東京	富山	東京	井之頭	讚岐	京都	同上	福岡縣	橫須賀	橫濱
佐藤清一郎殿	中村寅之丞殿	山下けい子殿	角谷八三郎殿	小林三郎兵衛殿	宇佐美英太郎殿	森脇忠市殿	丸尾仁平殿	下間君代殿	金光正藏殿	有田廣殿	竹內政子殿	中村金藏殿
金壹圓也	金貳圓也	金貳圓也	金貳圓也	金五圓也	金壹圓也	金壹圓也	金貳圓也	金拾圓也	金五圓也	金貳拾圓也	金壹圓也	金壹圓也

小計金五拾參圓也

通計金參千四百拾五圓八拾四錢也

右御寄附を忝うし難有く奉存
候竝に謹みて奉感謝候也

懺悔錄
附錄「歎異鈔」

本書は著者が實驗の信仰に基づき、古來求道者の金料玉條たる『歎異鈔』の眞髓、惡人救濟の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歲以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と、最後に佛陀攝取の慈光に接して人生の黒闇頓に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中大安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一道ある所以を可嚀懇切に詳述したり。蓋し之れ『懺悔錄』の名ある所以にして發行以來本書を縁として入信の士に乏しからざるは吾人の私に感謝措く能はざる所。而して今回其第六版を發行するに及び、紙質製本等更に充分の改良を施せり。求道者諸君の必讀を冀ふ。

人生と信仰

第一章	人生問題と信仰
第二章	悲觀思想と信仰
第三章	倫理力行と信仰
第四章	犯罪心理と信仰
第五章	社會問題と信仰
第六章	國家秩序と信仰
第七章	世界宇宙と信仰

第三版

定價卅錢
郵稅四錢
袖珍美本

第六版

定價 廿錢
郵稅 貳錢
袖珍美本

所込申

東京市本郷區森川町一丁目番地
振替口座東京座東一六六六番

求道發行所

二版近角
發賣常觀
親鸞聖人の信仰

全一冊
布綴上製
金八十錢
郵税八錢

親鸞聖人は他力信仰の體現也。「教行信證」は如來醍醐味の結晶也。著者聖人の人格を敬慕し、多年寶典の眞髓を咀嚼し、人生實驗の火寶の中に溶かし來りて、其信念を鑄成したるものは本書也。世の人生に苦めるもの、罪惡に泣けるもの、之によりて救済を得べし。

曉鳥
敏著
佛教入門

信の一字は佛教の骨であり髓である。これは佛教の門であつて亦室である。本書はこの信を簡明に説けるもの。自己とは何ぞや、如來とは何ぞや、信仰とは何ぞやの解答は、本書が平易なる文字の上に生々と現はれてゐる。佛教によつて精神の革新を希ふ人に一讀をすゝめず。

文學博士 著
南條文雄

第四版發賣
全一冊
クロース綴
金八十錢
郵税八錢

多田
鼎著

第二版發賣
全一冊
クロース綴
金八十錢
郵税六錢

菊阪洋綴
總布クロース
一千頁内外

高倉大學寮學監
大谷派本山侍董
吉谷覺壽講師新撰

五帖
一部
御文講述

定價金參圓八拾錢
豫約金貳圓五拾錢
豫約期限 明治四十三年六月三十日
と見做さず 製本十月上旬より着金順により送本

豫約申込所

京都市東六條 電話二二五八番
大阪口座一七〇四番

法藏館

文學士 羽溪了諦先生新著
(四月中旬發賣)

解信御信

總クロース表金文字入
堅牢洋綴美裝、三百五十頁
定價金壹圓
郵税八錢

法藏館

健全なる信仰！是れ現今社會の各方面より要求せられつゝある絶叫也。健全なる信仰とは何ぞや。時代の智識に一致して、而も吾人の心靈上絕對の慰安と一道の光明とを齎すものならざる可からず。本書は新進達識の著者が自ら信樂しつゝある純他力教の眞髓を開闡するに近代的新智識を以てして、智解信證の至境を宣揚せる高著なり。内に苦み靈に飢るたる現代の人よ！速に甘露の清泉滾々として湧き出づる本書に來りて圓滿具足の靈趣を樂まざるや。理と信、智と情との衝突に悶えつゝある求道の士よ！疾く本書に接して之が調和の妙趣を味ひ、以て絕對安住の境に優遊せざるや。

發行所

京都東六條 電話二二五八番
大阪口座一七〇四番

法藏館

三宅雪嶺先生序

加藤咄堂先生
杉村楚人冠先生

高島米峯著

廣長

結城素明畫伯畫
定價 七拾錢
郵税 八錢

三宅雪嶺先生曰はく
加藤咄堂先生曰はく
杉村楚人冠先生曰はく

「米峰は前はゆるい日八丁、八丁の日に廣長があると言ふ迄もなし。又曰く、著者は儒士にして記述、商人にして學者、宗加藤咄堂先生曰はく、米峰今中興の氣を向して『廣長』と名づく。其の言ふ所は世事に練なる學者の企て及ばざる所にして、其の論ずる所は肉を割し骨を通じて當代人士の肺腑を刺す。これ堂々然と、才華横溢なり。細穿たざるなく微打たずば已まず、米峰の筆を發するに法あり。實に道あり、この法を説き、この道を教へてお客様といふものゝ立場を明にして、以て商人といふものゝ位置を高め、而して買ふものにはうんと買へと勧め、賣るものにはうんと賣れと告ぐるものゝ即ちこの書なり。但し讀みたいといふ人、人に讀んで貰ふがために書いたものにして、もとより讀まうと思はないものにまで強ひて讀ませやうといふやうな所を毛頭これなきものなり。」

島田三郎先生序
高島米峰著

理想的商業

定價廿五錢

郵税四錢

商業とは貨物を賣りたいといふ人に賣つて遣はすといふほどの事なり。買ひたいといふものと何とも言はざるものに賣らうとするが如きは、是れ豈無理の甚しきものならずや。今の商人平氣でこの無理を行ふ、こゝに於てか百弊起る。夫のお客様といふものゝ無味にのまけり。是がためにして、商人の矢張り無味に飽きせらるゝも亦是がためなり。賣るに法あり。實に道あり、この法を説き、この道を教へてお客様といふものゝ立場を明にして、以て商人といふものゝ位置を高め、而して買ふものにはうんと買へと勧め、賣るものにはうんと賣れと告ぐるものゝ即ちこの書なり。但し讀みたいといふ人、人に讀んで貰ふがために書いたものにして、もとより讀まうと思はないものにまで強ひて讀ませやうといふやうな所を毛頭これなきものなり。」

前田博士題字

泉文學士叙傳

再版

よろこびの跡

近角常觀序

故管瀨夫人日誌

紙數二百頁 定價廿錢
部以上引割 郵税二錢

申込所

求道發行所

本書は昨年求道第九、十兩號に亘り告白欄に其の一部を掲載せる故管瀨令夫人の日誌全部を輯録し紀念の爲め出版せるものなり。夫人の日誌が飾るなく儼然なく、信仰より来る日常生活其儘の告白なる事は既に本誌讀者の知了せらるゝ處、今や更に次版なる道友諸君の一讀を勧告す。

施本用小冊子

近角常觀校訂

(部數に應じ充分割引す)

冠頭 歎異鈔

第四版

定價五錢

郵税四冊迄二錢

此の「歎異鈔」は讀み易きよう字をまばらに植え、校正を嚴密になし、且つ冠頭を加へて諸聖教中より参照すべき要文を引用し、叮嚀懇切に作りたるものなり。

近角常觀校訂

(部數に應じ充分割引す)

冠頭 唯信 唯信鈔文意鈔

新 版

定價七錢

郵税三冊迄貳錢

「唯信鈔」は親鸞聖人の法契聖覺法印の述作にして、「唯信鈔文意」は聖人特に本鈔を尊重して、其文意を講授し給へるものなり。聖人に文意の作あるに見ても本鈔の他力信仰上如何に貴重の聖典たるかは知るに足らん。本所今此の兩書を一冊にまとめて刊行す。冠頭を加へて参照用文を引用したる等凡て歎異鈔に同じ。同朋諸君の精讀を勸む。

發行所

東京市本郷區森川町
振替口座一六六九六番

求道發行所

規定

- 一 本誌は毎月一回十五日發行とす
- 一 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
- 一 郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一 凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
- 一 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
- 一 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一 本誌定價左の如し

部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一冊に付五厘
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

明治四十三年五月十二日印刷
明治四十三年五月十五日發行

發行所

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

求道發行所

(振替口座東京一六六九六番)

大賣捌所

東京市神田區表神保町
東京堂

前號要目

求道

◎惟佛是真

自督

◎讃岐所感

講話

◎廻向と慚愧

聖傳

◎テヤ、トクカ釋尊傳

久遠劫の昔

近角常觀

識仰

◎蓮如上人の御文

和田龍造

五帖目第一通

告白

◎今は唯本願の綱にすぎるばかり

生沼きく子

時報

◎讃岐傳道